猫と四斗俵

世の中に鼠ほどやくざな餘計者は滅多にあるまい。あの鼠の征服者として猫を見つけた事は、アメリカ大陸の發見にも優る人生の重大事である。

ゲエテはその「狐の裁判」で、「猫は形こそ小さいが、分別もあり、哲學をも知つてゐる」と言つた。實際猫は鼠を捕る以外に、哲學の素養があるので、よく色々の偉い人のお友達となる事が出來た。佛蘭西の名高い政治家リセリウが、死際に可愛い自分の飼猫に、少からぬ遺産を殘したのは名高い話だ。

猫がその遺産を慈善事業に寄附したか、それとも利廻りのいい債券でも買込んだかどうかは知らないが、よしんばその遺産が無かつたにしても、猫は多くの哲學者のやうに空腹を抱へるやうな事は滅多にない。何故なら、猫は哲學と一緒に鼠を捕る事をも知つてゐるから。

猫の食糧には限りがある。往時から猫一匹の一年中の食糧はざつと米一俵としたもので、もしかこれ以上に食べるやうな猫があつたなら、それは大物食で、哲學者とは言ひかねる。

ところが、この事實から、立派な一つの發明を仕遂げた男がある。それは讃岐の鹽田忠左衞門といふ爺さんで、爺さんは猫に四斗俵一つは餘りに値段が張り過ぎる。

「俺ならその半分で濟ませてみせる。」と自慢らしく言ひ言ひしてゐる。

實際爺さんはそれを行り通してゐるのだ。その法といふのは、收穫の時籾二斗を鼠一年分の餌として、土間の隅つこに俵のまま殘しておくのだ。すると、夜になつて家中の鼠がこそこそ這ひ出して來て、鱈腹それを食べるが、籾二斗でちやうど一年分の餌に足りるさうだ。

「こんなにさへしておくと、鼠も溫和しいもので、米櫃一つ齧らなくなる。お蔭で猫など飼はなくともいい。」

だがそれは猫を唯の鼠取りとして見た上のことで、猫はその外にまた哲學者なのである。

喜捨金一文

時鳥が啼くやうになつた。――この鳥が啼く頃になると、いつも青葉若葉の滴るやうな黄檗の空が思ひ出される。

黄檗といへば、あそこには名高い鐵眼和尚の一切經の木板が遺つてゐる。この木板に就いては、次のやうな話が言ひ傳へられてゐる。

鐵眼は一切經の版行を思ひ立つと同時に、それは一人や二人の富豪の手で出來上るものではない。一體お經を出版すると、それに關係した人達は、その功德によつてきつと淨土へ生れる。富豪はちつとやそつとの費用の喜捨は出來ようが、淨土へ生れるには恰好な人達でないことを知つてゐるので、成るべく一切の衆生からその寄附を受ける事にした。

で、先づその手始めに、京の粟田口に立つて往來の人に勸化をすることにした。鐵眼は暫

く人通りの絶えた午過ぎの大通りをあちこちと見廻した。すると、土に塗れた水呑百姓が大きな黑牛を追ひながら、のつそりと通りかかるのが目についた。正直で、おまけに沈默家の牛だ。出來ることなら功德によつて淨土へ入れてやりたかつたが、牛は百姓と同じやうに喜捨金を持ち合はさないらしかつたので、鐵眼は默つて見送つた。

牛がそこらの木立に隱れると、行き違ひにきりりとした若侍が一人、急ぎ足に西から東へと通りかかつて來た。鐵眼は直ぐに飛び出した。

「一切經の印行を思ひ立つた坊主でございます。何分の御喜捨をお願ひ申します。」

若侍はじろりと尻目に鐵眼の顏を見た。この男は人から物を貰ふことも、人に物を與れることも嫌ひらしかつた。で、素知らぬ顏をして行き過ぎようとした。

鐵眼は一足先へ廻つた。そして侍の前に立ち塞がりながら、

「どうぞ、御喜捨をお願ひ申します。」

と、佛樣がわざと見本にこしらへたらしい大きな頭を下げた。若侍はさつと身を躱しざま、器用にすり抜けて急ぎ足にすたすたと歩を早めた。

鐵眼は後から追ひ縋つた。そして、道の二三町も歩くと、また後から、

「どうぞ御喜捨をお願ひ申します。」

と、うるさく呼び掛けた。若侍はそんなことには少しの頓着もなく、小唄か何かを歌ひながらすたすたと道を急いだ。

鐵眼も同じやうに道を急いだ。かうして道の一里半も來ると、若侍は堪りかねたらしく、たうとう振返つた。

「うるさい坊主だな。」

「うるさいと思召したら、どうぞ御喜捨を……」

「ぢや、喜捨して遣はさう。」と若侍は腰の巾着から一文錢をたつた一枚取出した。そして鐵眼の大きな掌に載せてやつた。「いいか、これが俺の喜捨金だぞ。」

「有難うございます。重々御禮を申上げます。」

鐵眼は頭が地面につくまで叮嚀にお辭儀をした。高が一文錢の喜捨にしては、お禮が少し負け過ぎてゐると思つたらしい若侍は不思議さうに、

「一文錢やそこいらの喜捨に、なぜまたそんなに……」

鐵眼は頭を持ち上げた。眼は鐵のやうな強い光に輝いてゐた。そして自分が今度一切經の版行を思ひ立つた事から、今日はその勸化の第一日なので、もしかうと思ひ込んだ人から喜捨を得なかつたら、折角の自分の志が挫けはしまいかと思つて、わざわざ一里半の坂道をうるさく追ひ縋つて來たのだといふことを打明けた。

「さうでござつたか。」若侍が初めて言葉を改めた。「それは御奇特な事で……」

若侍は一文錢のやうに地面に穴があるものなら身を匿したいと思つたらしかつた。

喫煙禁止

グラントと言へば、南北戰爭の將軍として、また十八代目の米國大統領として名高い人だが、この人が大統領に就任してから當分の間、田舍の自宅からワシントンへ汽車で通つてゐ

たことがあつた。ある日のこと、グラントはいつものやうに借切列車に腰を下しながら、ポケットから葉卷を一本取出して徐かにそれに火をつけた。そして香の高い紫色の煙に、犬のやうに鼻をくんくんさせながら、いい氣持になつてゐた。汽車が途中の或る小さな驛に停ると、着飾つた一人の貴婦人がちよつとした手荷物を抱へながら慌しく入つて來た。

婦人はグラントの前に席を占めた。それまで南北戰爭當時の追懷か何かに思ひ耽つてゐた大統領は、眠さうな眼をちよつとあけて、自分の前に坐つた婦人の樣子をちらと見たらしいが、性來婦人といふものにあまり趣味を持つてゐなかつたこの軍人大統領は、そのまま又眼を細めてじつと葉卷を喫してゐた。

すると、だしぬけに癇走つた女の聲が聞えた。グラントは晝寢をしてゐた鶩のやうに、大儀さうに片眼を明けた。見ると、件の婦人が目くじら立ててこちらを睨んでゐた。

「あなたどうぞ煙草をお止め下さい。あたし煙つぽくて堪りませんから。」

グラントはそれを聞くと、喫みさしの葉卷をそのまま窓の外に投げ棄てた。そしてあけてゐた片眼をもとのやうに徐かに閉ぢた。無口な大統領は何一つものを言はなかつた。

グラントが汽車に乘り合はした婦人客に、何一つものを言はなかつたのは、なんの不思議もなかつた。彼は生れつきのむつつりやで、何時だつたか大統領に在職當時、世界博覽會が米國に開かれたことがあつた。開會式の當日、總裁として何か一つ演說をしなければならなかつたので、平素の彼を知つてゐる人達の中には、この沈默家がどんな挨拶をするだらうかが可なり面白い話題となつてゐた。すると、その當日彼は椅子から立ち上り、馬の上から兵卒を指揮するやうな調子で、

「今日から博覽會を開きます。皆さん御遠慮なく見物して下さい。」

と言つたきり、他に何一つ喋らなかつたくらゐだから。

件の婦人客が、不作法な紳士をやりこめた嬉しさに胸をわくわくさせてゐると、汽車はまた次の停車場に着いた。すると、驛長が靜かに扉をあけて入つて來た。そしてその婦人客を見ると聲を尖らして言つた。

「あなた。すぐに此處を出て行つて下さい。こちらは大統領閣下の借切列車なんですから。」

大統領の借切と聞くと、婦人は顏を眞赤にした。そして手荷物を抱へて逃げるやうに姿を

隱した。

滴水と峨山

宗風の森嚴なので聞えた天龍寺の由利滴水が、死ぬる三四日前の事だつた。いつも自分の側で看病をしてゐてくれる弟子の橋本峨山を呼んで、今更らしく訊いた事があつた。

「お前、天龍寺を再建して、どうしようと思つておいでなのだい。」

天龍寺は維新の當時、薩摩の村田新八に燒き捨てられたのを、その後峨山が再建に骨を折つて、やつと出來上るばかりになつてゐたのだ。峨山は師僧の氣に入るやうに聲を和げて言つた。

「老師の御病氣御全快を待つて、今一度宗風を揚げていただきたいと存じまして。」

それを聞くと、滴水は乾葡萄のやうな干からびた顏に眼を光らせた。

「俺が死んだらどうするのぢや。」

滴水は自分の生命がもう二三日も持たない事を知つてゐた。よくある禪坊主の癖で、その短い時日を靜かに味ははうとするよりも、何か問答に費したいらしかつた。峨山は病人の枕もとに手をついて言つた。

「その折には誰か高德な方を招いて、法燈をついで戴きませう。」

滴水の眼は意地惡さうにまた光つた。喘息を病んだ風琴のやうな變にしやがれた聲で、うるさく附け込んで來た。

「それから、その次はどうするのぢや。」

それを聞くと、峨山は急に鷹のやうにむつくりと頭を持ち上げた。そして腹一杯の聲を張りあげてわめくやうに言つた。

「そんな御心配は御無用でございます。」

大きな聲が、病室一杯に響き、藥壜に響き、そして皺くちやな病人の胸の底にまで響くと病人の眼は初めて和いだ。そして氣に入つたやうににつこりと笑つた。

豫言者

京都の工科大學教授N氏が、世界戰役當時、ある新聞記者との對談に、その頃方々に頭をもちあげて來た化學工業會社がどう成り行くものか、例へば鹽酸加里の會社にしても、戰前はたつた一つしか無かつたのが、戰爭が始まると、ざつと四十にも殖えた。もしか戰爭が濟んだら三つ四つしか殘らないかも知れないといふ事を話した。

N氏は、その翌朝京都を發つて九州地方まで旅をしなければならなかつた。混み合つた汽車に乘つてうとうとしてゐると、ふと誰かが自分の名を呼んでゐるので、驚いて目をさました。それは隣席に坐つて新聞を擴げてゐる會社の重役でもありさうな、でつぷり肥つた大阪辯の男だつた。その男は向う側に胡床をかいた自分の道連れらしいのに話しかけてゐた。

「この新聞で見ると、京都大學のNたらいふ男が、今四十もある鹽酸加里の事業が、戰後に

なつたら、たつた三つほか殘らん言うとるが、たつた三つとは何できめたもんやらうて。」

「たつた三つ？　怪體な事言ひよるな。」胡床をかいた男は鼻の先で笑つた。「そやつたらこちとらの會社はどうなるんや。阿呆らしい。」

N氏は吃驚した。首を伸ばして隣の男の繰擴げてゐる新聞紙を覗いて見た。なる程その男の言つた通り、記事には今の夥しい鹽酸加里事業が、戰後には三つに減つてしまふと、きつぱりと書いてあつた。N氏は自分が「三つ四つしか殘るまい。」と言つた言葉を思ひ出して、それをきつぱり三つにしてしまつた新聞記者の勇敢なのに驚いた。そしてかういふ新聞記者を外科醫者にしたら、跛者の患者などはきつと片足を切り揃へてしまふだらうと思つた。でその正誤かたがた、自分がその話をした當人のN教授だといふことを打明けようかと思つたが、でもさうすると、隣の男はきつと會社の株を持つてくれと言ふだらうと思つて、そのまま默つてゐる事にした。

ところが、戰爭も濟んで此の頃になつて見ると、N氏の言つたやうに、數ある鹽酸加里の會社は、次から次へと倒れて行つて、殘るものはたつた三つになつた。N氏は人の顏さへ見

ると、得意さうに以前の話を持ち出して、

「どうだい君、僕が豫言したやうに會社がほんたうに三つになつたから驚くぢやないか。」

と、豫言者のやうな顔をして言ひ言ひしてゐる。

司令官と一兵卒

遣歐米軍の司令官パアシング將軍が、ある日自分の兵卒の宿舍を巡視に出掛けたことがあつた。多くの兵卒が風琴を鳴らしたり、骨牌を弄つたりしてゐるなかに、たつた一人、一番年齢の若さうなのが、人の居ない隅つこで、じつと書物に讀み耽つてゐるのが將軍の氣についた。

將軍はつかつかとその若者の方に近づいて行つた。

「何を讀んどるな。」

若い兵卒はひよいと後を振返つて、慌てて立つて敬禮した。そして愛想つ氣のない調子で返辭をした。

「はい、本を讀んでました。」

「本は解つとる。」將軍は蟹のやうに嚴つべらしい顔をした。「だが、何の本だと訊いとるのぢや。」

若い兵卒は今まで讀み耽つてゐた書物を默つて將軍の手に渡した。將軍はちらと表紙の名前に眼をやつたが、それだけでは何の本だか呑み込めないらしく、中味を二三枚めくつてみて、やつと自分達にはとても解りさうにない本だといふ事だけが解つたらしかつた。將軍は書物から離した眼をじつと兵卒の顔に注いだ。

「かなりむづかしいことが書いてあるらしいが、お前にこんな本が解るのかい。」

「はい、解ります。」

若い兵卒はきつぱりと言ひきつた。

「ほう、それは偉いな。」將軍は胡散さうな顔つきをして、書物を兵卒の手に返した。「だが

どうしてお前にそれが解るな。」

「どうしてつて、別に不思議はありません。」若い兵卒は心もち顔を染めながら言つた。「私はこの本の著者なんでございますから。」

「ほう、お前がこの本の著者ぢやとお言ひか。」

パアシング將軍は慌てたやうに二つ三つ瞬きをして、じつと兵卒の顔を見た。尊敬すべき若い著作家は、別段異つてもゐなかつた。馬に似た人間の多い世の中に。

前大統領の嘘

米國の前大統領タフトが、ある時自分の所屬の政黨員から頼まれて、Somerville の田舍町に講演に出掛けて行つた事があつた。講演が無事に濟んで、その晩タフトは、田舍町の狹つ苦しい旅籠屋に、象のやうな大きな體軀を投げ出して、ぐつすり寢入つた。

あくる朝、食事を早く濟ますと、タフトは直ぐに停車場へ急いだ。田舍の旅籠屋で、氣のながい訪問客につかまつたら、どんな酷い目に遭ふかも知れないといふ事をタフトはよく知つてゐた。だが、停車場に乘りつけてみると、タフトがあてにした汽車は特別急行で、そんな田舍町の驛へは停らないといふ事がわかつた。

タフトは當惑した。外套の隱しに兩手を突込み、停車場前の廣つ場を歩きながら、大きな靴の踵で暴に地面を蹴散らしてみたが、地面を蹴つたところで急行列車がとまる譯でもなかつた。

さうかうするうちに、タフトはいい事を考へついた。で、早速停車場から鐵道管理局あてに次のやうな至急電報を打つた。

「大きな團體客が待つてゐる。特別急行列車をSomervilleの停車場にとめてくれまいか。」

暫くすると、管理局から返電が來た。タフトはその電報をあけてみてにやりとした。なかには次のやうに書いてあつた。

「承知した。」

時間が來ると、急行列車はけたたましい地響きをさせて入つて來た。前大統領は手提鞄をさげながらのつそりと客車に入つて行つた。すると、すれ違ひに出て來た列車長は、がらんとしたプラットフオオムを見渡しながら不思議さうにぼやいた。

「大きな團體客つてどこに居るんだらう。」

「それは乃公の事だよ。」

タフトは澄ました顏で言つた。

列車長は默つて前の大統領を見上げた。成程大きな圖體はちよつとした團體客ほどの重みがありさうに思はれた。

二人は聲を合はせて笑つた。

接吻

マベル・ボオドマン孃といふのは、米國の赤十字社でちやきちやきの働き手だが、孃の意見によると赤十字の勤務はひとり戰時のみでなく、平常の衞生狀態をもつと立派にし、そして出來る事なら、天國へ送る死人の健康狀態をも申分の無いものにしなければならないのださうだ。

孃は先頃南米地方へ旅行をした事があつた。その折或る地方で、皮膚の赤茶けた土人が地面に蹲踞(かひつくは)つて、玉蜀黍の煙管で脂(やに)くさい煙草をすぱすぱやつてゐるのを見かけた。

ボオドマン孃は雌狗のやうに鼻を動かした。そして言つた。

「爺や。お前そんな脂臭い呼吸(いき)をして、天國へ行けるとお思ひかえ。」

「ひ、ひ、ひ……」と土人は齒の拔けた口で笑ひ出した。「脂臭え呼吸だと言はつしやるが、おいら死ぬ時にや呼吸を引き取りますだよ。」

むかし道命といふ名高い坊さんがあつた。おそろしく聲の美しい人で、お經を誦(よ)むと、その調子が自然に律呂に合つて、いい音樂でも聽くやうな氣持がするので、道命が法華を誦むとなると、大峰から、熊野から、住吉から、松尾から色々の神樣がわざわざ聽きに來たもの

だ。そんな折には、道命はちよつと後を振向いてみて、

「今日も神様が來てゐられるな……」

と、得意になつて一段と聲を張上げて讀んだ。

道命は和泉式部と好い仲だつた。（道命だつて男だから女を愛するのに不思議はないが、僧侶といふ身分に對してすこし不都合だと思はれる向は、どうか成るべく内聞にして置いて欲しい。道命も名僧だし、和泉式部も聞えた歌人の事だから。）ある夜式部の家に泊つて、翌朝何喰はぬ顔で寺へ歸つて、例のやうに法華を誦みにかかつた。

ふと後方を振返つてみると、いつも見馴れた立派な神様達の代りに、薄穢い乞食のやうな佛様が一人立つてゐた。道命はお經を誦みさして訊いた。

「貴方はどなたですか。」

佛様はちよつと會釋をした。

「私は五條西洞院邊にゐる佛ぢや。つねづね評判のお前様の讀經を聽きたいと思つてゐたが平素は梵天帝釋などのおいでがあるので遠慮してゐた。ところが今日はお前様の身體が汚れ

てゐたから、他様はおいでがない。そこで遣つて來ましたぢや。」

氣がついてみると、道命は前の夜の口をそのまま嗽がないでお經を誦んでゐたのだつた。

机

今の中村歌右衛門の父芝翫は、隨分常識外れの妙な癖で聞えた男だが、この俳優の數ある癖のなかで一番面白いのは、そら火事だといふと、どんな遠方でも構はない、印半纏を引つかけて直ぐに飛び出した事で、火の粉の散るなかをうろうろ駈けずり廻つて、歸途には茶飯の一杯も掻き込んで、いい氣に納まつてゐたものだ。

今一つ妙な癖は指物が好きで、閑さへあれば何かこつこつと指物師の眞似事をしてゐたが手際はから下手な癖に、講釋だけは他一倍やかましく、鉋や鋸などは名人の使つたのでないと手にしなかつた。中でも一番文句が多かつたのは指物に用ひる木で、ああでもない、かう

でもないと贅を言つてゐたが、一度などは一日土藏に入つてこつこつやつてゐて、日の暮れ方にやつと外へ這ひ出して來た。

「かう見ねえ。立派な煙草盆が出來上つたぜ。」

見ると、歪形の煙草盆を大事さうに掌に載せてゐる。もしやと思つて土藏を覗いてみると女房が一番大事の唐木簞笥をすつかり引き剝してしまつてゐたさうだ。

噂によると、國學者のNさんもよく指物をした。しやれた机が拵へたい、それには伐つてから百五十年以上經つた材木でないと、狂ひが出來るからといつて、方々探し廻つてゐるうちに、下谷の古い藥舗で恰好な看板を見つけて、やつとそれを手に入れるには入れた。

脚には何がよからう。名人の吹いた尺八が面白からう。さうだ、それに限るといつて、閑にまかせて方々道具屋を尋ね歩いた。

「お店には名人の吹いた尺八がありますまいか。四本ばかりでいいんだが……」

仕合せと道具屋は名人を拵へる事にかけては、その道の師匠よりもずつと傑れた腕を持つてゐるので、Nさんは十日も經たぬうちに名人の吹いた尺八を三本までも手に入れた。

だが、机の脚は馬の脚と同じやうに四本無くてはならない。あとの一本を發見するためにはNさんは二週間も無駄足を踏ませられた。男が女を忘れるには、三日あれば十分だ。女が男を忘れるには、七日で不足はない筈だ。二週間も經つ間に、Nさんはすつかり机の事を忘れてしまつた。忘れてよかつた。すべて自分に都合の悪い事は、忘れるに越した事はないのだから。

お水

大阪の一心寺に、元和のむかし天王寺で討死をした本多忠朝と家來九人とを葬つた墳のある事は、誰もがよく知つてゐる筈だ。

忠朝は生きてゐる間は、鐵の棒を揮りまはす外には何の能も無かつた男に相違ないが、死んでからは面白い内職にありついてゐる。内職といふのは禁酒の願を聞くといふ事なのだ。

一體男に禁酒させるのは、女に有難がられる第一の功德で、世の中の仕事といふ仕事は澤山あるが、女に有難がれる仕事ほど行りがひのあるものはない。

忠朝の墓前に小さな壺があつて、いつも蓋がしてあるが、中には銀のやうな水が溢れてゐる。酒を斷たうとする者は、その水を戴いて飲むと、何時の間にか酒嫌ひになるといふ事だ。

ある日そこを通りかかると、頭を島田に結つた十七八の女が、壺から水を汲んで、家から持つて來たらしい硝子瓶に入れてゐるのがあつた。

「どうするんだね。」

と訊いてみると、

「うちの旦那はんが、酒癖が悪うおますよつて、ぶぶに入れて上げるのだつせ。」

と、女は救世主のやうな、おせつかいな顏をして私を見た。實際女といふものは、男の知らぬ間に、その食物のなかに色々な物をつかみ込むのが好きで好きでたまらぬものらしい。それが酒斷の水であらうと、鹽であらうと、モルヒネであらうと、みんな持合せのおせつかいがさせる事なので、男は目をつぶつて謹んでそれを戴かなければならぬ。

ハウプトマンの「沈鐘」を讀むと、鐘師のハインリツヒが山の上で怪しい女と酒を飲んで踊つてゐるところへ、村に殘した子供二人が大事さうに小さな瓶を提げて坂を上つて來る。瓶のなかには何が入つてゐるのだと訊くと、悲しさうな顏をして、

「母樣の涙ですわ。」

と言ふ條がある。

母樣の涙は少し鹹つぱいが、忠朝の墓の水は冷つこい。どちらも妙に酒飲みの親父さんには効力がある。

奉納

ある彫金家が法隆寺の峯の藥師で取調べたところによると、お藥師樣に奉納物の鏡には隨分傑れた價値のものが尠くなかつたが、同じ獻上物の刀劍は皆なまくらで、鏡と比べたらて

んで話にもならなかつたさうだ。峯の藥師は祈願を籠めると、靈驗のあらたかなので聞えた佛様で、大願成就の曉には、その祈願者の身につけてゐる、一番大切な物を奉納しなければならぬ言傳へになつてゐる。

身に着けてゐるうちの、一番大切な物といふと、往時は言ふまでもなく、男には刀、女には鏡でなければならなかつた。といふ譯で、峯の藥師には刀劍と鏡とがどつさりあつて、何れも素晴しい名作揃ひだといふ噂だつたが、調べてみると、鏡には逸品が鮮くないのに、刀は揃ひも揃つてなまくらばかりだとは、とんだ愛嬌である。

これで見ると、女には正直者が多いが、男には佛様の前でもペテンを行り兼ねない手合が少くないといふ事になる。願を掛けて願が叶ふ。掛けた當座は腰の業物を奉納しようと思つてゐながら、願が叶ふとついそれが惜しくなつて、間に合せの贋物でごまかしてしまふ。お藥師様が刀の鑑定が下手で、おまけに無口だからいいやうなものの、若しか犬養木堂のやうな鑑定自慢で、口穢い佛様だつたらたまつたものではなからう。

醜女の家

伊勢の山田から二里ばかりの在所に、磯村といふ土地がある。言傳へによると、白拍子靜が母の磯禪師は、ここに住んでゐたのださうで、禪師の血統はその後も傳はつてゐるが、產れる娘は皆醜婦揃ひである。

これは靜が人並すぐれた美人だつたので、多くの男にも苦勞をさせ、女自身にも悲しい夢ばかりを見て來たのを思ふと、もう美人には懲り懲りだとあつて、

「娘が生れます事なら、いつそ醜女にしてやつて下さい。」

と、神様に祈願を籠めたのによるものださうだ。

美人を生せて下さいと、願を籠めたところで、神様は滅多に承引しては下さらないが、醜女を孕ませて下さいと賴むと、大抵はお引請けになる。お引請けになるのは何も神様の手並

が拙くて醜女の方が手頃なからではない。神様は女に哲學を教へようとせられるからだ。

女は美人に生れると、悲哀が多い。「藝術」が必要な所以だ。醜女に生れると、諦めなければならぬ。「哲學」が無くてはならぬわけである。

心得

新橋の老妓M子が、そのむかし、雛妓として初めて座敷へ突き出された時、姐さんから、假りにも妓の忘るまじき三ケ條の心得を說き聞かされた。

三ケ條といふのは、第一、お客の惡てんがうに腹を立てぬ事。第二、晴衣の汚れを氣にしない事。第三、七里けつぱいお客に惚れない事。萬一惚れねばならぬ時は、なるべくよぼよぼの老人を見立てる事。

M子は、この三ケ條の心得をちやんと頭に疊み込んでお座敷に出た。M子はその頃まだ男

よりも、チョコレエトの方が好きな年頃だつたので、お座敷で客に惚れる程の冒險はしなかつた。よしんばどんな冒險好きの妓があつても、チョコレエトの代りに男に惚れるやうな心得違ひはしない筈だ。妓といふものは、十人が十人、先づチョコレエトを喰べてしまつて、それからそろそろ男に惚れるものなのだ。

だが、M子はあとの二ケ條には、お座敷へ出ると早速ぶつつかつた。その時のお客は若い醫者で、どんな醫者にも共通な自惚だけはたつぷりと持合せてゐた。で、耳を嚙んだり、鼻先を押へたり、色々な戯けた眞似をしてM子に調弄つた。

M子はてんで頓着しなかつた。それが癪に觸ると言つて、お客はM子の頭から熱燗の酒をぶつ掛けた。酒は肩から膝一面に流れた。紅い長襦袢の色は透綾の表にまで滲み透つて來たが、M子は睫一つ動かさうとしなかつた。

姐さんはそれを聞いて大喜びに喜んで代りの晴衣を拵へて呉れた。お客は醉から醒めて、眞靑な顏をして謝りに來た。匙加減や見立違ひで人を殺しておいて、詫言一つ言つた事のない醫者にとつては、謝りに來るのは魂を吐き出すよりも苦しかつたに相違ない。

燒棒杭

神様の數多い作品のなかで、女が第一の傑作であるといふ事は、多くの婦人雜誌が主張する所で、自分もそれに就いては少しも異議はない。女の美しさ。——それだけでも十分なのに、おまけにまた女の狡さ。これを傑作と呼ばないのは盲目である。

かういふ神様の傑作も、竈の前へ置きつ放しにしておくと、いつとなく煤ばんで來る。すると、淺はかな男心は直ぐにがらくたでも扱ふやうに、ぞんざいな風を見せて、どうかするとその存在までも忘れたりする。

この頃英字新聞を見ると、ある男女が結婚して四五年經つと、互ひに鼻につき出して、顏を見るのも厭になつた。そこでいつそ別れようといふ事で、日を定めて辯護士の許に落合つて、その手續をする事に話を運んだ。

その日になつて、女は素晴しく着飾つて來た。身動きする度に衣擦れの音がして、麝香猫のやうな香がぷんぷんするので、男は眩ひがしさうになつて來た。

「見違へるほど美しいぢやないか。どうしたんだね。」

「いいえね、貴方にお別れすれば、獨身でも居られないしと思つて、嫁入口を捜しに行つて來たんですわ。」

「おそろしく早手廻しだな。良いのを見つかつたかい。」

男は吐き出すやうに言つた。

「あら、もう御存じなの、貴方にも宜しくつて言つてたわ。」

女はちよつと笑つてみせた。

男はいきなり女の手を取つて、少し相談があると言つて辯護士の家を出て行つた。三十分後には、この二人は映畫館に入つて、夫婦鳩のやうに肩を竝べて戯け散らしてゐたさうだ。

謹んで世上の女に告げる。男は皆かうしたものだ。彼は「女」の鑑定家としては、最も與みしやすいやくざ者である。

鰯

劇評家のAさんは剽輕な面白い爺さんだが、夫人はなかなかのしつかり者なので、お尻の長い友達などは、ふだんは餘り寄りつかない癖に、夫人が不在だと聞くと、直ぐに駈けつける。Aさん自身も夫人が旅立ちでもすると、

「おい、女房が不在になつたから遊びに來ないか。」

と、よく使を出して催促したものだ。

ある夏の事、御多分に洩れぬKといふ老人が、夫人の不在を狙つて無駄話に尻を腐らせてゐると、表を鰯賣りが通りかかつた。K老人は急に話を止めた。

「おい、Aさん。あの鰯を呼んでくれ、今日は拙者が一つ御馳走をしたいから。」

鰯を買つた老人は、葱を買ひに主人を近所の八百屋へ走らせた。茶氣のあるAさんは、一

錢がとこ葱を提げて嬉しさうに歸つて來た。平素女房にいたぶられてゐる亭主は、女房の不在に臺所の隅で光つてゐる茱切庖丁や、葱の尻つぽなどに觸つてみるのが愉快でたまらないものなのだ。

「いい葱だ。Aさん。氣の毒だが、ついでに扇子の古いのを一本めつけて呉れないか。」

「扇子？　扇子をどうするんだい。」

Aさんは、片手に葱をぶら提げながら、神聖な夫人の居間を捜して、破れた扇子を一本持ち出して來た。

K老人は料理人がするやうに、手拭を襷に袂を絞つて、臺所で俎板を洗つてゐた。

「や、御苦勞、御苦勞。ぢや、君は其處で見てゐ給へ。鰯はかうやつておろすものなのさ。」

老人は無駄口を叩きながら、古扇子の骨の間に鰯の骨を挿んで、さつと扱くと、魚は器用に三枚におろされた。

「なるほど、巧いもんだな。」

Aさんは、禿頭をふつて感心をした。

小一時間も經つた頃、やつと鰯の「ぬた」が出來上つて、食膳の皿に盛られると、味利きだといつてK老人は一箸頬張つて、口をもぐもぐさせてゐたが、急に變な顏をしたと思ふとはたと膝を叩いて笑ひ出した。

「失敗(しま)つた。あんまり急いだものだから、鰯の鱗をふくのをすつかり忘れちやつた。」

「なに、鱗をふくのを忘れたつて……」と言つて、Aさんも箸をつけたが、「そんなでもないや。うまく出來てるぢやないか。」

と、そのままむしやむしや食べ出した。ほんたうに鰯の鱗はとつてなかつたが、不斷女の刺のある言葉を食べつけてゐる者にとつては、魚の鱗などはなんでもなかつた。

死人の下駄

人間といふものは、生れて來る時に下駄を穿いて來なかつたせゐか、身投でもして死ぬる

時には吃度履物を脱いでゐる。それもそこらへだらしなく放り出さないで、きちんと爪先を揃へたまま脱ぎ捨ててゐる。まるで借りた物を返すといつた風だ。えて身投でもする人は、借りた金を返さないやうな輩に多いが、履物だけは自分の持合せでありながら、借物ででもあるやうにきちんと取揃へてゐる。だから芝居でもそれに倣つて、舞臺で情死者の身投をする時には、俳優はきまつたやうに履物を揃へる。

それも古風な身投などの場合に限らず、電車や汽車で轢死をする場合にも、履物だけはちやんと揃へてゐるから可笑しい。どんな粗忽家でも下駄を履いた儘で、軌道に飛び込むやうな無作法な事はしない。鴨が毛皮を脱いで鴨鍋へ飛び込むやうに、自殺でもしようといふ心掛のある者は、履物を脱ぎ揃へて軌道に横になるくらゐの儀式はちやんと心得てゐる。

電車の車掌なども、轢死者があつた場合には、それが男か、女か、老人か、子供か、馬鹿か、悧巧かを吟味する前に、先づ履物を調べる。そして履物がちやんと揃へて脱ぎ捨ててあるのを見ると、

「占めた。やつぱり自殺だつた。」

と、吻と胸先を撫でおろすさうだ。だから間違つて電車に轢き殺される場合には、成るべく履物を後先へ、片方は天國へ、片方は地獄へ屆くほど跳ね飛ばすことだけは忘れてはならない。さもないと自殺にきめられて、慰藉金も貰はれない上に、理窟の立たない厭世觀をさへ抱かされるやうな事になるかもしれない。

同じ淵でも、身投をする場所は大抵きまつてゐるやうに、長い電車線路でも、轢死する場所は大抵見當がついてゐるさうだ。だから、賢い運轉手になると、その區間だけは速力の加減をする事を忘れない。

高野の英靈塔

工學博士田邊朔郎氏は、軍人軍屬のためには靖國神社を初め、いろいろの鎭魂(たましづめ)の道具があるのに、學者や藝術家にはそんな設備が少しも無いのは、國家として、國民として片手落な

次第だ。これだけは是非なんとかしなければといふので、近々高野山に素晴しく大きな英靈塔を建立する考へださうだ。

考へは結構だが、自體學者や藝術家などといふ連中には、旋毛の曲つたのが多いから、英靈塔を建てたからといつて、そのまま成佛はしなからう。尤も學者や藝術家は生前忙しく暮したせゐで、まだ高野山を見ないで死んだ輩も多からうから、博士の手で招待でもしたら、その人達の靈魂も一度は吃度登山するに相違ない。

高野山には、色々な人の骨がたんと納まつてゐる。あれは彌勒出世の曉には、弘法大師が皆の手を執つてお迎へに出られる誓願があつたからださうだが、大師の考へでは、高々三十人くらゐの積りらしかつた。今のやうにたんと納まつては始末に困るだらう。そんな事から彌勒菩薩も今ではちよつと顏出しが出來なくなつたらしい。

むかし、熊阪長範が山で一稼ぎする積りで、夜が更けて高野へ登つた事があつた。大きな伽藍はすつかり扉を閉ぢてゐるなかに、ただ一つ小さな灯の見える所があつた。覗いてみると、皺くちやな坊さんが一人立つてゐて、附近には人間の骨がごろごろ轉がつてゐた。長範

は自分が物を盗みに來た事も忘れて、わけを訊くと、坊さんは例の彌勒出世の大師の誓願を說いて聞かせた。

長範はそんな事なら、自分も一緒に願ひ度いと言ひ出した。長範の腕は盗みをするだけに寸も長かつたし、納骨には打つて附けの代物であつたが、山でもまだ一稼ぎしなければならないので、ちよつと出し惜しみをした。で、石でもつて前齒を一つ叩き折つた。

「それぢや、前齒を一つ納めて置きませう。どうぞお忘れのないやうに。」

と駄目をおしてその齒を坊さんの掌に載せた。前齒はこれまで幾度か嘘を吐いた齒ではあつたが、その齒が一本無くなつたからといつて、この後嘘を吐くのに別段差支へるわけでもなかつた。

長範は好い物を納めた。だが、時期が少し早過ぎたやうだ。もつと齡をとつて、入齒をする頃にしても遲くはなかつたのだ。彌勒は今だにぐづぐづしてゐられるから。

蟲の聲

むかし、公家の某が死にかかつてゐると、不斷顏馴染の坊さんが出て來て、(醫者が來るのが遲過ぎる時には、きつと坊主の來るのが早過ぎるものなのだ。) 枕もとで珠數をさらさら鳴らしながら、

「早く念佛をお唱へなさらなくつちや。さもないと中有でお迷ひになるかも知れませぬぞ。」

と、ひどく心配さうな容子で、最後の念佛を勸めにかかつた。

「中有と申しますと……」

と看護の者が訊くと、坊さんは答へた。

「廣い荒野でな。西も東も判りませんぢやて。」

その話を苦しい間にも病人が洩れ聞きをした。病人は骨張つた顏を坊さんの方へ捩ぢ向け

た。

「お上人。そんな荒野にも秋が來ますと、蟲が鳴きませうな。」

お上人は急に行詰つたやうな表情をして、てれ隠しにちよつと空咳をした。無理もない、中有の野に蟲がゐるかゐないかといふ事は、どのお經にも書いてなかつた。お上人はもしか間違つてゐたら、お布施を返す積りでひとりぎめの返事をした。

「さやうさ。野といひますからには、蟲もゐるにはゐるでせうて。」

公家は死顏に寂しさうな笑を洩らした。

「蟲さへゐる事なら、中有とやらに迷つてもいいと思ひます。だからお念佛だけは申しますまい。」

坊さんは苦笑をして口の中でぶつぶつ言つてゐたが、病人はたうとうお念佛の一遍も唱へないで亡くなつてしまつた。その中有の野とやらには、蟲がゐたかゐなかつたか、今だにはつきりしない。

赤栫檀

むかし、觀世家に豐和といつて、家の藝は素より香聞（かうぎき）にもいつぱし聞えた男がゐて、金春流の某と仲がよかつた。で、閑な折にちよいちよい遊びに行くと、金春家では香好きな豐和への御馳走とあつて、いつも祕藏の香を炷いてくれたものだ。

豐和はそれを嗅ぐたんびに、

「どうも素敵な香だ、なんでもいはく附きの物に相違ない。」

とは思つたが、迂濶に言ひ出して、主人に物惜しみをされても詰らないと思つて、わざと默つてゐた。言ふまでもなく、金春家の主人は香道にはずぶの素人であつた。

ある時、香道の家元蜂谷貞重が江戸へ下つて來た。豐和は蜂谷の顏を見ると、懷中から懷紙に包んだものを取出して、蜂谷が生命より大切の鼻を引拗るやうにして、それへ押へつけ

た。

「ちよつときいてみて呉れたまへ。實はこなひだから君が下つて來るのを待ちくたびれてゐたのだ。」

紙包は豊和がこつそり金春家から取つて來た香爐の灰であつた。

蜂谷は自慢の鼻をちよつとその灰に近づけたかと思ふと、眼を圓くして吃驚した。

「これは赤梅檀だよ。どうも素敵なものを炷いてるね。」

「え、赤梅檀だつて。」

豊和は直ぐに表へ飛び出して、金春家を訪ねた。

豊和は何氣ないさまで、いろいろと世間話を持ち出してゐたが、ふと思ひ出したやうな口ぶりで、

「ときに近頃御無心の次第だが、こなひだぢゆういつもお炷きになつてゐたあの御祕藏の香ですな、あれを少しばかり御無心がねがはれますまいか。」

と、切り出した。

金春の主人は、何のことかと思ふと、香の話なので、

「いや、お安い御用で……」

と、その場で件の香を小指のさきほど割つて與へた。

豊和はそれを左の掌で戴いたかと思ふと、しかと右の掌で押へつけた。そして嬉しまぎれに大きな聲でわめいた。

「有難う。今だから言ふが、この香こそ名代の赤梅檀ですよ。」

「なに、赤梅檀……」

金春家の主人は、直ぐに手を伸ばして件の香を取戻しにかかつたが、豊和は手ばやく内ふところにしまひ込んでしまつた。

骨董好きの富豪に教へる。いつまでも祕藏の骨董を失ふまいとするには、自分達の家族を成るべく物識りにしておくが一番手堅い。

隱し藝

蕪村の畫の門人に田原慶作といふ男があつた。ある日の暮れ方に師匠を訪ねると、蕪村の家では戸を締め切つてゐた、宵つ張りの師匠だのに今日に限つて早寢だなと慶作は思つた。（蕪村が宵つ張りなのになんの不思議はない筈だ。彼は畫家であるとともに、夜更しが附きものの俳諧師でもあつた。）

慶作はまた出直さうかと思つて、逡巡（もじもじ）してゐると、寢靜まつた筈の家の中から、ばたばた物を敲く音がして、折々何か掛聲でもするらしい容子が聞えた。

「怪體（けつたい）やな、一遍訊いてみようか。」

慶作はとんとんと表戸を敲いてみた。

すると、内から「どなた？」といふ聲がして、扉は靜かに開けられた。たしかに蕪村の聲

に相違ないので、慶作は不審しながら入つて行くと、そこらぢゆうに箒や塵はたきがごたごたと取散らされて、師匠はひとりでくすくす笑つてゐた。

わけを訊くと、女房は娘と女中とを連れて、逗留がけで里へ歸つて行つたので、その留守にちよつと芝居の眞似ごとをしてゐたとのことだつた。

「こなひだ芝耕の芝居を見て、すつかり感心させられたもんやさかい、ちよつくら眞似をしてみたが、なかなか出來よらんわい。」

蕪村は聲を出して笑つた。

京都の或る法學者は、家族がみんな不在になると、すつくと逆立になつて、書齋からのそりのそりと這ひ出して來て、玄關から臺所まで一廻りして來る癖がある。法學士だけにこの男もいろんな事に理窟をつけないでは承知しないが、たつた一つこの逆立だけには理窟をつけてゐない。理窟が無い筈だ。本人の積りでは逆立は藝術ださうだから。

男といふものは、女房のゐる前では公然（おほつぴら）に行（や）りかねる「藝術」をそれぞれもつてゐるものだ。芝居の眞似事だらうが、逆立だらうが、女房が不在になつたら、さつさとおさらへをす

るがいい。――これは女にしても同じ事だが、女はかういふ時には、大抵パン菓子を食べるものらしい。それにしても立派な藝術だ。

大きな鼻

むかし、通尖上人といふ坊さんがあつた。内外諸宗にわたつて博識の名が隠れもなく、自分にも大分それを自慢に思つてゐた。

ある秋の夜の事、説教が濟んで、上人はひどく氣持がよささうな顔をしてゐた。一體説教とか講演とかいふものは、よく出來た場合には、聽衆(きき)よりも演者の方がずつと氣持のいいもので、基督のやうな眞面目な男でさへ、名高い山の上の説教を濟ました後では、すつかり好い氣持になつて、氣の毒な癩病患者などをも直ぐに癒してやつてゐた。だから、説教の濟んだあとで、

「どうも素敵でした。みなもすつかり感心しちまつて、もつと何か聽きたさうにしてゐますよ。」とでも言つてみるがいい。坊さんは吃度袈裟の袖をたくし上げながら、手品の隠し藝でもして見せるにきまつてゐる。

通尖上人はすつかり上機嫌で、この分ぢやどんな難問が出ようとも、すぐに解いて呉れよう。ほんたうに吾ながら偉い物識りになつたものだと、高慢さうな顔つきで附近(あたり)をじろじろ見まはしてゐると、だしぬけに隔ての障子が破れて、中から大きな鼻が一つ飛び出した。おやと思ふうちに、鼻はまたすつと引込んで、障子はもとのやうになつた。

流石の通尖も、これには度膽をぬかれてしまつた。變な顔をして暫く眼をぱちくりさせてゐたが、すつと席を滑り下りたと思ふと、そのまま見えなくなつてしまつた。あとでよく調べてみると、大樹寺といふのに入つて、專修念佛(せんじゆねんぶつ)の行(ぎやう)をおこなひ濟ましてゐたさうだ。よくよく自力には懲りたものと見える。

唾

希臘の或る皮肉哲學者が、富豪に饗ばれた事があつた。哲學者が富豪に思想を說きたがるやうに、富豪はまた哲學者に自分の住んでゐる世界を見せびらかしたいものなのだ。

その富豪も皮肉哲學者に自分の邸宅を自慢したいばかりに、飾り立てた客室から、數寄を凝らした前栽の隅々までも案內して見せた。

「如何でげせう。これでも先生方のお氣には召しますまいかな。俺としては相應趣向も凝らした積りなんでげすが……」

かう言つて富豪はその大きな顏を、哲學者の方へ捩ぢ向けた。

哲學者はそれには何とも答へないで、いきなり痰唾を富豪の顏へ吐きかけた。富豪は蕃茄のやうに眞赤になつて怒つた。

「何をしなさるんだ。他人の顏に唾をしかけるなんて、餘りぢやどわせんか。」

皮肉な哲學者は落着き拂つたもので、

「いやはや、あまり結構づくめなお邸なんで、唾が吐きたくなつても、何處にも恰好な場所が見つからないもんですから、ついお顏を汚しましたやうな譯で……」

と、別に謝らうともしなかつた。

勿論いつの時代でも、富豪の顏と靈魂とは、數あるその持物のなかで、一番穢いにきまつてゐるが、それに唾を吐きかけたのは、流石に皮肉哲學者の見つけ物である。

紋

紋所といふものは、もとは車の紋から起きたといふ說があるが、眞實のことかどうだか知らない。德川家が葵を紋所に用ひるやうになつたのにも、色々拵へ物の傳說がある。

酒井家の説によると、家康の祖父清康が岡崎にゐた頃戦があつた。酒井家の主人は氣の利いた男だと見えて、その折圓盆に勝栗を盛つて主人の前に差出した。

清康はそれをじつと見て、

「ほほう、勝栗ぢやの。これは縁起がいい。」

と、硬つぱしい掌に取上げたかと思ふと、ばりばりと音をさせて齧つた。

栗の下には葵の葉が二三枚敷いてあつた。その日の戦は無事に徳川家の勝となつたので、清康は記念に葵の葉を紋所に使ふやうになつたといふのだ。

本多家ではまた異つた傳説を持つてゐる。本多家の祖先某は、もと賀茂の社家であつたが豊後の本多荘に流されたので、本多と名乗るやうになつた。

賀茂の社家だつただけに、本多家では二葉葵の紋所を使つてゐると、それを清康が見て、

「いい紋所ぢや、俺の家で使ふ事にしよう。」

と言つて、勝手に取上げてしまつた。もともと賀茂の二葉葵には長い葉莖がくつ附いてゐるのだが、清康はそんな物は無益だといつて摘み切つてしまつた。家康の祖父(おぢい)さんだけに、こ

んな事にも儉約(しまつ)だつたと見える。

ラフカヂオ・ヘルン、またの名小泉八雲氏は、時たま日本服を着る事があつたが、羽織の紋にはヘルンといふ自分の名からもじつて、青鷺をつけてゐた。鷺はヘルンの紋として恰好な動物であつた。

京都に若い畫家があつた。畫が拙かつたせゐか、度々女に捨てられた。だが、どうしても諦められなかつたものと見えて、羽織の紋所には、自分を捨てた女五人の名前を書き込んで平氣でそれを着てゐた。羽織は最初に見捨てた女が拵へてくれたもので、地は薄かつたが、女の心よりは長持ちもしたし、値段も幾らか張つてゐた。

男裝婦人

獅子や驢馬と共同生活を營んでゐた佛蘭西の女流畫家ロザ・ボナアルは、何處に一つ女ら

しい點のない生れつきで、夕方野路でも散歩してゐると、それを見た農夫達は、

「へい、旦那樣。今晩は。」と叮嚀にお辭儀をして別れ際に後を振返つてみて、「あの小柄な旦那樣は、いつも今時分この邊を徜徉(ぶらつ)いてゞざるな。」

と、朋輩に言ひ言ひしたものださうだ。

米國にメエリイ・ヲルカアといふ有名な婦人がある。この婦人は別な事でもつと聞えてもよいのだが、幸か不幸か、いつも男裝をしてゐるので、それで一層名高くなつてゐる。

なぜ男裝してゐるかに就いて、この婦人の答は至極はつきりしてゐる。

「私にとつて婦人服の袴(スカアト)よりも、ズボンの方がずつと氣持がよゞざんすから。」

至極もつともな理窟で、かういふ勇氣のある婦人は、素足がズボンよりも氣持がいい事を知つたら、思ひ切つてそのズボンをも脱ぎ捨てるかも知れない。

ある時、この婦人がマサチウセツツの某市へ旅をした事があつた。途中で道を迷つてひゞく當惑してゐるところへ、農夫が一人通りかかつた。農夫といふものは、どんな時にでも、どんな所へでも、よく通りかかるもので、基督がお說教をしたがつてゐる時でも、追剝が物

を欲しがつてゐる所にも、えてして農夫がそこを通り合はせる。そして靈魂を奪はれたり、外套を引剝がされたりする。農夫といふものは、四福音書へ出るにも、探偵小說へ出るにもごく日當が廉くて、おまけに物が解らないから、手數が掛らなくていい。男裝婦人はその農夫に訊いた。

「ちよつとお訊ねしますが、某市へはこの道を行きますか。」

「ああ、おつ魂消た。」農夫は眼をこすりこすり言つた。「俺はあ、なんにも知んねえだ。お前樣のやうな女子みたいな男初めて見ただからの。」

獨身儒家

西依成齋は肥後生れの儒者で、京都の望楠書院で鳴らし、攝津の今津にも十年ばかり住んでゐて弟子取りをしてゐたので、京阪ではよく名前が通つてゐた。

その成齋の弟子に、度々色街へ出掛けて行つて、女狂ひに憂身を窶してゐる男があつた。いろいろ兩親が意見をしてみても、一向ききめがないので、

「一つ先生様の御力で……」

といふ事になつた。

成齋はその弟子を呼びつけた。そしてたつた今朱文公に會つた歸り途だといつたやうな生眞面目な顏をして、

「お前はこの頃頻りに遊里へ出浮くさうだが、怪しからんことだ。以後は吃度慎んだがよからう。」

と、高飛車に叱りつけた。

弟子は先生の劍幕がひどいので、兩手を膝の上に揃へて、鼠のやうに縮み上つてゐると、成齋は變な眼つきをして、その手首を見つめた。若い弟子の手首は、妓の握り易いやうに纖細に出來てゐた。

「廓通ひといふものは、第一金がかかるばかしでなく、身體の養生にならない。俺などはそ

んな遊びを止めてから今年でもう二十年にもなるが、その故かしてこんなに達者になつた。」

と言つて、先生は大きな兩手を、弟子の鼻先で振廻してみせた。成程腕つ節は勁さうに出來てゐるが、その二十年といふもの「運」などしつかり摑んだ事のなささうな掌だなと弟子は思つた。

弟子は怖る怖る先生の顏を見た。

「有難うございました。お言葉は夢にも忘れないやうに心掛けませう。」

と言つて、叮嚀にお辭儀をした。

「ついてはちよつと伺ひますが、先生は當年お幾つでいらつしやいますか。」

成齋は案外叱言の効力が早かつたのと、自分の達者な腕つ節とに滿足したらしく、聲を上げて笑つた。

「俺かの。俺は當年九十三になる。」

「してみると……」

弟子は先生が道樂を思ひ止つたといふ二十年前の齡を繰つてみた。そして眼を圓くして驚

いた。言ひ忘れたが、成齋は生涯獨身で暮した男であつた。

明恵と雑炊

栂尾の明恵上人は、雑炊が非常に好きな人であつた。ある時、侍僧の一人が師を慰める積りで、心をこめてうまい雑炊を拵へた。

明恵は何氣なく膳に對つたが、好物の雑炊が目につくと、につこりと笑つた。そして、

「今日は御馳走だな。」

と言つて、侍僧の顔を見た。侍僧は師の氣に入つたのが嬉しいと見えて、剃りたての圓い頭をこくめいに下げた。

「お上人様が平素からお好きでいらつしやいますから。」

明恵は箸を取つて一口頬張つたかと思ふと、右手の指先で障子の桟を目にもとまらぬ速さ

でちよつと撫でた。侍僧が吃驚して見てゐると、明恵は何喰はぬ顔でその指先を嘗めて、それからまた雑炊を食べようとした。

侍僧は不思議さうに訊いた。

「お上人様。つかぬ事をお訊き申すやうですが、たつた今貴僧(あなた)様は障子の桟を撫でて、それをお嘗め遊ばしました。あれは何かのお蠱(まじな)ひでもございますか。」

明恵は尼さんのやうに口を窄めて笑つた。

「いや、蠱ひでも何でもない。そなたが拵へて呉れた雑炊が餘りに味がよいものだからの。」

侍僧は障子の桟を見た。桟には埃が白く溜つてゐた。埃は正直なもので、掃除をなまけると直ぐに溜るものだなと、そんな場合にも彼は思つた。だが、雑炊がうまいからといつてその埃まで嘗めなければならない理由がわからなかつた。

明恵は言葉を添へた。

「あまりに雑炊がうまいので、つい染着心(せんちやくしん)でも出來ては怖しいと思つたものだから、そんな事のないやうにと、ちよつと埃を嘗めたまでなのだ。」

栗鼠

ある薩摩の殿様に、九十を過ぎても、いろいろの道樂に憂身を窶さないではゐられないやうな達者な人があつた。

數ある道樂のうちで、殿様は一番變り種の小鳥や獸が好きだつたので、自分の力で手に入れる事が出來るものは、悉く集めて娯しんでゐた。

英雄僧マホメットは、ひどく小猫を可愛がつたもので、ある日着物の裾にそつと寢かしておくと、不意に外へ出掛けなければならない事件が持ち上つた。だが、可愛い猫を起したくはないといふので、マホメットは着物の裾を鋏でつみ切つて立ち上つたといふ事だ。

政治家のリセリウもまた愛猫家として聞えてゐたが、死ぬる時には遺言で莫大な遺産金まで猫に與れてやつた。猫がその遺産金をどう費つたかは、私がその相談に與らなかつたから

よく知らない。

薩摩の殿様は、ある日籠のなかから栗鼠と梟とを取出して喧嘩をさせてみた。栗鼠も梟もせうことなしに喧嘩を始めたが、栗鼠はふだんから殿様が自分を可愛がつてくれるのは、自分の藝が見たいからだらうと思つて、籠の中でとんぼ返りばかり稽古してゐたので、こんな喧嘩にはすつかり用意が缺けてゐた。で、梟のために散々に啄かれた。

栗鼠は逃足になつて、いきなり殿様の懐中に飛び込んだが、悔しまぎれにいやといふほど主人の臍を嚙んだ。

殿様はそのせゐで四五十日ばかり傷療治をしなければならなくなつた。傷が治つた後でも別段賢くはなつてゐなかつた。賢くなるには餘りに齡を取り過ぎてゐたから。老人といふものは、こんな場合にも、栗鼠が狂者だつたとか、臍がうつかりしてゐたとか、えてしてそんな言譯をしたがるものなのだ。

廣告欄

英國の文豪キプリングが、ある時米國の雜誌が見たいから五六種送つてもらひたいと、紐育にゐる友達の許へ賴んでよこした事があつた。

米國の雜誌は、いづれも廣告の頁がどつさりあるので知られてゐる。キプリングの友達は幾らか郵稅を儉約したい考へから、廣告の頁だけ引裂き、殘つた內容を一纏めにして送つてよこした。

キプリングは包を解いてみると、雜誌はみんな廣告の頁だけ引裂かれてゐる。何故だらうと小首を傾げたが、それが郵稅の節儉(しまつ)からだと聞いて、文豪はぶつぶつおこり出した。

キプリングの言ひ條では、米國の雜誌は廣告欄が面白いので取柄がある。內容と廣告とどつちに新知識が多いと訊かれたら、誰だつて選擇に迷はない筈だ。

「そんなに郵稅が節儉したかつたら、內容の方だけ引裂いて呉れたらよかつたのに。」と、友達まで不平を申込んださうだ。

記者へこまさる

トルストイ伯は、その名著「アンナ・カレニナ」のなかで、塞爾維對土耳其のいざこざから、もしか戰爭でもおつ始まるやうだつたら、筆一本で喧しく主戰論を吹き立てた人達だけで、別に中隊を組織して、一番前線にそれを使ふ事にしたい。

「すると、吃度素晴しい中隊が出來る。」と皮肉を言つてゐる。

イダ・ハステッド・ハアバア女史といふと、婦人參政權の贊成論者としてかなり名を賣つてゐるが、この婦人が最近紐育の有名な新聞記者に會見を申込んで來た。それはこの記者を生擒にして新聞紙の上で熾んに婦人參政の贊成論でも書き立てさせたら、吃度効力があるだ

らうと思つたからだつた。

「婦人參政權ですつて？　今時そんなくだらない……」と新聞記者は吐き出すやうに、「もしか私達の國が、歐洲戰爭に引張り出されるとして、誰が武器一つ取ることを知らない輩に投票なんかするものですか。」とそつ氣なく言つたが、相手の險しい顏色を見ると、ちよつと調弄つて見たくなつて、「奧樣。あなただつたらどうなさいます、もしか戰爭でも始まりましたら。」

「はい。あなたのしていらつしやる通りにやりますわ。」夫人は急に牝馬のやうに鼻息を荒くした。「お國の爲だからつて、他の人達はみんな戰線に立つて血を流すやうに書き立ててさ。そして自分二人は編輯室の安樂椅子に踏ん反りかへつてゐませうよ。」

男のお產

むかし、大森元孝といふ醫者があつた。すべて醫者といふものは、診斷が拙からうが、學問が無からうが、唯病家へ行つて落着き澄ましてゐさへすれば、それで良い評判を取る事が出來るものなのだが、不仕合せにも、この元孝は性來ひどい慌て者だつた。

ある時、松平大學頭の徒士が病氣に罹つて招びに來た。元孝は二つ返事で飛んで行つた。そして仔細らしい顏つきで、病人の腹を診てゐたが、ちよつと小首を傾げて、

「お產後でございますか。」

と訊いた。

徒士は變な顏をしたが、まさか醫者が自分を產婦と取違へもすまい、これはきつと自分の聞き違へに相違なからうと思つたので、「さうです。」と言つて輕く頷いて見せた。徒士はどんな醫者でもが病人が自分の診斷通りに返事をして呉れるのを喜ぶものだといふ事をよく知つてゐた。

醫者はじつと脈を押へたまま、やがてまた、

「お產はいつ頃でございました。」と訊いた。

病人は困つたらしく頭を搔いたが、たうとう泣き出しさうな顏をした。

「先生。どうか御冗談をおつしやらないで下さい。私は疝氣を病んでるんですから。」

その瞬間、醫者は相手の顏を見て、蝦のやうに赧くなつた。

「いや。とんだ粗忽を申しました。實は先刻御婦人の病氣を診て、ついそれが頭に殘つてゐたものですから。」

かう言つて二度三度お辭儀をした。頭には何も殘つてゐないと見えて、輕さうに動いた。

また一人、下總に宗仙といふ醫者があつた。その頃の曆學者として聞えた伊能忠敬の娘が病氣をした時、聘ばれて毎日のやうに病室に入つて行つた。

ある日の午過ぎ、例のやうに慌てて入つて來た。心安立に碌々挨拶もしないで、膝を進めたと思ふと、其處に居合はせた娘の伯父の手を取つた。伯父は密源といつて頭を圓めた僧侶であつた。

「成程、昨日よりはずつと快くなつた。もう案じる程の事はない。」

醫者が安心したやうに言ふので、密源はその手を相手の鼻先に突きつけた。

「宗仙さん。これは拙僧の腕でござりまするぞ。」

「や、これはどうも。とんだ粗忽を……」

と言つて、宗仙は知らぬ世界へでも來たやうに、泳ぐやうな手附で本當の病人を搜しにかかつたといふ事だ。

してみると、今の醫者が病人の手を間違はずに握るといふ事だけでも非常な進歩である。よしんば男の手に產後の脈が搏たうと、それはほんの些細な事で……

音樂家の頭

パデレウスキイといへば波蘭の聞えた音樂家だが、最近米國に渡つた時、ある日ボストンの停車場で汽車を待ち合はせてゐた事があつた。音樂家はショパンの樂譜でも踏むやうな足つきをして、步廊をあちこちぶらついてゐた。

十二三のちんぴら小僧が物陰から飛び出して、この音樂家の前に立つた。

「旦那。磨かせていただきませうか。」

パデレウスキイは立ちどまつて、默つてその小僧を見おろした。紛ふ方もない靴磨きで、橙のやうに圓い小さな顏は、靴墨で眞黑に汚れてゐた。

音樂家は洋袴（ズボン）の隱しから銀貨を一つ取出して、掌に載せた。

「靴は磨かなくともいい、お前の顏を洗つておいでよ。さうするとこの銀貨をあげるから。」

その折、音樂家の靴はかなり汚れてゐたが、彼はその晩直ぐに天國の階段に上るのでもなかつたし、米國の土を踏むには、それで十分だと思つてゐたらしかつた。

「はい、はい。すぐに洗つて來ますよ。」

小僧はさう言つて、その足で直ぐ構內の洗面所をさして駈け出して行つたかと思ふと、しばらくすると洗ひ立ての綺麗な顏をして、パデレウスキイの前に歸つて來た。音樂家は、

「よし、よし。」

と言つて、銀貨を小僧の濡れた掌に載せてやつた。小僧はちよつとそれをおし戴いたが、すぐにまた音樂家の掌にかへした。

「旦那。銀貨はこのままお前さんに上げるから、これで散髮をおしよ。」

パデレウスキイは驚いて額を撫でてみた。成程帽子の下から長い髮の毛がもじやもじやと食み出してゐた。それは音樂家が自慢の髮の毛だつた。

馬が惡い

むかし、矢野大膳といふ馬乘の名人がゐた。ある日友達の一人をたづねようと、愛馬に乘つて家を出た。しづかな秋末のことで、街には仕事をもたぬ人間や、赤蜻蛉が羽を伸ばしてそこらを飛びまはつてゐた。

大膳は何を考へるともなく、馬の手綱を取つてゐた。ふと氣がつくと、つい二三間前を美しい女が歩いてゐた。

「いい女だな。どこの娘だらう。」

大膳はその一刹那に、自分が獨身者であるのを大層幸福に思つた。――獨身といふものは結構なもので、どんな艶女とでも、どんな醜婦とでも結婚する事が出來るものだ。

大膳は女の後姿に見惚れながら、じつと手綱を搔い繰つてゐたが、暫くして四邊を見ると今通りかかつてゐるのは、ついぞ見も知らぬ街で、友達の家とは反對の方角だつた。

「はてな。どうしてこんな所へ出て來たらう。」

大膳は鞍の上で獨言を言つたが、その次の瞬間に馬が勝手に女の後をつけてゐるのに氣がついた。馬は鞍の上の主人には頓着なく、平氣で女の後を追つて行つた。

しばらくして女は遊女街へ入つた。そしてとある一軒のしやれたお茶屋の暖簾をくぐつたので、初めて女が遊女である事が判つた。馬と主人とはお茶屋の門先に立つて、殘り惜しさうに内を覗き込んでゐた。

それから大膳は遊女買ひを始めた。そしてせつせとその女の許に通ひつめたが、暫くすると金に詰つて來た。

「困つたな。いい金の蔓はないものかしら。」

大膳は思案に苦しんで、馬に相談してみたが、馬は何も言はないで首をふつた。大膳はやがてその馬をも手離してしまつた。馬を賣つた金も十日とは殘つてゐなかつた。

「切支丹へ入らう。さうすれば幾らかの金になるさうだから。」

大膳は金が欲しさに切支丹に入つた。そして貰つた金で、こつそり神樣に隱れて遊女屋通ひを續けてゐた。

そのうち切支丹が法度になつて、信徒は皆火炙りにせられた。大膳もその數には漏れなかつた。

「俺が悪いのぢやない。馬が悪かつたのだ。」

大膳はかう言つて、炭團のやうになつて燒け死んだ。

馬だの、女房だのが悪いと、男はよく酷い目に遭ふものだ。

手品師と蕃山

手品といふものは、あまり澤山見ると下らなくなるが、一つ二つ見るのは面白いものだ。むかし、備前少將光政が、旅稼ぎをする手品師の岡山の城下に來たのを召出して、手品を見た事があつた。

一體大名や華族などといふものは、家老や家扶たちの手で、始終上手な手品を見せつけられてゐるものなのだが、備前少將は案外眼の明るい大名だつたので、用人達もこの人の前では、

「二二が六。」

と、手品の算盤珠を彈いて見せる譯にはいかなかつた。で、少將は一度手品といふものが見たくてたまらなかつたのだ。

手品師は恐る恐る御前へ出た。夏蜜柑のやうな痘痕面をした少將の後には、婦人のやうな熊澤蕃山や、津田左源太などが畏まつてゐたが、手品師の眼には顏の見さかひなどは少しもつかなかつた。大勢の顏が風呂敷包のやうに一かたまりになつて動いた。

手品師は小手調べに二つ三つ器用な手品を見せた。それから金魚釣といつて居合はせた小姓の懷中から、金魚を釣り出さうといふ自慢の藝に取りかかつた。

小姓は氣味を惡がつて、小さな襟を搔合はせたりした。手品師はさつと釣針を投げて、勢よく小姓の襟先を掠めて、それを引上げたが、釣針の先には何もかかつてゐなかつた。

手品師は慌てて、二度三度同じ事を繰返したが、その都度手先が段々そそつかしくなるばかりで、金魚は少しも釣れなかつた。そして終ひには、金魚の代りに小姓の前髪を釣り上げた。小姓は鮒のやうに泳ぐ手附をした。それを見て一座は聲を上げて笑つた。

手品師は眞赤になつて疊の上に這ひつくばつた。額からは油汗がたらたらと流れた。

「これまで一度だつて仕損じた事のない手品なのでござりますが、今日はまた散々の不首尾で、お詫びの申上げやうもござりませぬ。」手品師は子供の手のひらでべそをかく蟬のやう

な聲を出した。「私めの考へまするには、このお座敷には人並秀れた偉い御器量のお方がゐらせられますので、それでどうも手品が段取りよく運ばないかのやうに存じられまする。」

備前少將はそれを聞くと、にやりと輕く笑つた。後の方では蕃山と左源太とが肚のなかで頷いたらしかつた。

手品師め。手品には失敗したが、巧い事を言つたもので、少將と蕃山と左源太とは、各自肚のなかでは、「その偉い器量人は多分乃公だな。」と思つたらしかつた。この人達にだつて自惚は相當にあつたものだ。金魚は釣れなかつたが、手品師は素晴しい物を三つ釣り上げてゐる。

女の舌を

發明家のエディソンが、ある朝自分の實驗室で、何か鳶色の藥料を乳鉢のなかで混ぜてゐると、そこへ美しい令孃がひよつくりと訪ねて來た。令孃はこの高名な發明家の實驗室を一目見て、何かの折の話の種にしたかつたのだ。

エディソンは發明も好きだが、發明の次には冗談も好きだつた。今自分の實驗室に入つて來た女の高慢ちきな顏を見ると、例の癖がむつくりと頭を持ち上げて來た。

「お孃さん。」と發明家は女に呼びかけた。「申しかねますが、ちよつと貴女のお舌を拜借出來ますまいか。私の舌はいろんな實驗ですつかり痺れてしまつて、皆目味が解らなくなつてゐるもんですからね。」

若い令孃は默つて頷いて見せた。耳の遠いエディソンには、言葉をかけるよりも、頷いて見せた方が解りやすかつた。令孃は舌の先でこの發明家の事業を輔ける事が出來たなら、こんな結構な事はないと思つてゐたのだ。

エディソンは小匙で乳鉢の藥料をちよつとしやくつた。女は牛乳をほしがる小猫のやうに美しい舌の先を出してその藥料を受取つた。

「どんな氣持がしますか。」

發明家は相手の顏を覗き込むやうにして訊いた。女は變に唇を歪めて何も答へなかつた。
「すうつと好い氣持でせう。」
女は默つて首をふつた。
「ひりひり舌を刺しはしませんか。」
「違ひます。」
女はやつと返事をした。
「はてな。」發明家はわざと小首をかしげた。「そんな筈はないんだが。それぢや、どんな味がしますか。」
「まあ、どんなにか苦かつたでせう。」
と、女は口一杯煙草の脂を頰張つた蟇のやうな口もとをしながら言つた。
「そんなに苦かつたですか。いや、どうも有難う。」
發明家はちよつと頭を下げた。
「先生。それ一體何のお藥なんですの。」

令孃は無氣味さうに訊いた。
「解りませんな。それを今私が研究中なんです。」發明家はまた乳鉢を手にしながら言つた。
「だが、ある男などは、この藥で馬を百頭も殺したと言ひますよ。」
「まあ、そんなお藥……」
令孃はキヤベツのやうに眞靑になつてしまつた。エディソンはそれを見て嬉しさうに笑つてゐた。

將軍の手紙

むかし、むかし、乃木大將と心やすくしてゐた軍醫上りの男爵があつた。長年そこに勤めてゐる女中の一人が、ある日の事、男爵の前に兩手を突いて、
「旦那さま。ちよつとお願ひがございまして……」

と、結ひ立ての頭を下げた。

男爵は讀みさしの新聞を膝の上においた。

「何ぢや。宿下りなら奥にでも頼んだがよからう。」

「いえ。」と女中は言ひ難さうにちよつと疊の上を見つめた。「甚だ申しかねますが、乃木さんのお手紙を二本ばかし戴かれませんでせうか。」

「うむ。乃木の手紙が欲しいといふか。」

男爵は今更のやうに氣をつけて女中の顔を見た。圓々と肥えた顔に細い目が開いてゐるので、いつも腦肭臍のやうだとばかし思つてゐたが、今見るとなんとかいつた女醫者によく似てゐる。腦肭臍と女醫者と。大層な違ひぢや。やはり邸にゐるお蔭だなと男爵は思つた。

「乃木の手紙をほしがるとは、近頃感心なことぢや。だが、何故また二本要るかの。」

女中はもう貰へるものだとばかし思ひ込んで、叮嚀に頭を下げた。

「はい、二本ございますと、帶が一本買へるさうに承りました。」

男爵は大きな掌で鼻先を撫で下されたやうに、目をぱちくりさせた。よく見ると、女醫者

に似てゐた女中の顔は、やつぱり腦肭臍に生寫しだつた。

「俺はな、乃木がそんなに名高くなるとも思はなかつたので手紙は殘して置かなかつたよ。」

男爵はかう言ひすてて、次の室へ入つた。

「まあ、勿體ない。お手紙をみんな失くしちまつたんだつて。」女中は腦肭臍のやうな細い眼で、旦那の後姿を見送りながら惜しさうに呟いた。「ほんたうに手紙だけは殘して置かなくつちや、どなたが腹をめすか知れたもんぢやないんだから。」

病氣必治法

詩人ゴオルドスミスは、文筆に從事する前に、醫者をしてゐた事があつた。なんと言つてもゴオルドスミスのことだ。唯もう神樣のお力に縋るより外には病人の持扱ひを知らなかつた程、結構な醫者だつたに相違ない。

だが、醫者といふものは有難いもので、ゴオルドスミスが職業替へをして詩人になつた後までも、わざわざ遠方から尋ねて來て、診察を賴むやうな病人も少くなかつた。そんな折にはお人好しの詩人は、氣輕に立ち上つて、

「どれ、どれ。診て上げよう。どんな容態かな。」

と、仔細らしい手つきで脈を取つたものだ。ゴオルドスミスは自分が拙い藪醫者である事はよく知つてゐたが、それと同時に藪醫者でない醫者が、この世の中に住んでゐようとも思はなかつたから、誰に遠慮する必要もなかつたのだ。

ある時、見すぼらしい姿をした婦人が一人駈け込んで來た。暢氣な詩人はその折書肆から居いた幾らかの原稿料を机の上にばら撒きながら、これで「天國」を購ふには、どういふ方法を取つたが一番便利だらうかなどと、そんなたわいもない事を考へてゐた。

婦人は泣聲で鼻を詰らせながら言つた。

「旦那樣。亭主が長の病氣で、食物さへ咽喉を通らなくなつてをります。かはいさうだと思召して一度診てやつて下さいませ。」

お人好しの詩人は、それを聞くと狼狽へ出した。婦人を引張るやうにして、その家へ駈けつけてみると、病人は乾魚のやうに瘦せた身體を床の中に横たへてゐた。詩人は脈を取つてみた。脈には大して悪い徵候も見えなかつた。で、よくわけを訊いてみると、食物が咽喉を通らないといふのは、實際通らないのではなく、通すべき食物が無いのだといふことがわかつた。詩人は念のため口をあけさせてみた。咽喉はジョンソン博士が大辭典を小脇に抱へたまま、素通りが出來るほど廣く開いてゐた。

尊敬すべき醫者は、仔細らしい顏をして言つた。

「いや、よくわかつた。これには良藥が家にあるから、後から取りに來るがいい。」

婦人はあとから藥を貰ひに、詩人のところへ出掛けて行つた。

「飲み方など詳しい事は、なかに書いてあるから。」

詩人は、藥の小箱を渡してくれた。箱は藥にしては少し重過ぎるやうに思はれたが、しかし輕過ぎるよりは氣持がよかつた。婦人は家に歸つて、いそいそと箱をあけてみると、なかから轉がり出したのは、藥ではなくて金貨であつた。包紙には詩人の手で、

「必要な時適宜分服の事。」

と書いてあつた。

醫者がほんたうに病人を治すつもりなら、方法はいくらもあるものだ。

小粒金

松平伊豆守が或る時將軍家光公の御前へ出るのに、白い德利を一つ持參してゐた。目ざとい將軍家は直ちにそれに氣がついたが、何喰はぬ顏をして伊豆の素振りを見てゐた。すべて將軍家とか大家の旦那方とかいふものは、出入りの者が白い德利を持つてゐようと短銃を持つてゐようと、成るべく見て見ぬ振りをしてゐなければならぬ。もしか咎め立てでもして、

「……」

默つてそれを目の前に突きつけられると、それ相應の挨拶をする面倒があるから。

伊豆守は膝の上に白い德利を抱き寄せて、將軍家の顏を見た。

「私、さる者から昨日古今無類の名酒を貰ひ受けましたから、上覽に供へようと存じまして唯今これへ持參いたしました。」

將軍家の目は、初めて氣がついたやうに白い德利の上に光つた。

「古今無類といふか。珍しいものぢやの。」

「御覽下さいませ。」

伊豆守は、德利を逆さまに疊の上にぶち撒けた。零れ出したのは灘の生一本と思ひの外、山吹色をした小粒金であつた。小粒金はちやらちやら音を立てて、疊の上を轉がつた。

「ほほう、結構な名酒を貰つて、羨ましいことぢやの。」將軍家は白い齒を見せてにやりと笑つた。「しかし、それには返禮をしなければなるまい。返禮には何をする積りぢやの。」

「さあ、その返禮でござりますて。」伊豆守はわざと呆けた顏をして見せた。「返禮には伊豆ほとほと持て餘してをりまする。恐れながら、これは御上へお願ひ申上げますより致方もござりますまい。」

將軍家はわざと外方を向いた。

「乃公は知らぬぞ。名酒を貰つたのは其方ぢやからの。」

伊豆守は聲を立てて笑つた。

「それでは致方ございませぬ。名酒はその者へ返し遣はすと致しませう。」

かう言つて、伊豆は掌を擴げて疊の上の小粒金を拾ひ集めた。小粒金は悪戯つ子のやうに指の間を擦りぬけて轉げ廻つてゐたが、それでも終ひには素直に元の德利に納まつた。白い德利は急にまた酒の入つてゐるやうな顏をした。

結婚と奴隷

米國はキスコンシンの上院議員ラ・フオレツトの愛孃フオラ・ラ・フオレツト女史は、あちらでも新しい女として名高い人で、先年脚本作家のレヨルデ・ミツデルトンと結婚したが、

結婚後も良人の姓は名乘らないで、やはり生家の氏名のまんまで押通してゐる。

何故そんなにするのだと訊くと、女史は「時の問題」など語るには、勿體ないやうな美しい唇から、

「何事も婦人の獨立のためです。」

と、きつぱりと返事をする。

フオラ女史の友達に、婦人運動に憂身を窶してゐる或る婦人があつた。この婦人が或る時民主黨議員クラウド・キチンの夫人を訪ねた事があつた。

女同士は夙くからの友達ではあつたが、主人のキチンとその婦人とは、まだ一度も會つた事がなかつた。

丁度天氣の好い日だつたので、キチンは薄穢い園藝服に破れた麥稈帽を被つて、せつせと玄關前の花壇で働いてゐた。

婦人は花壇の前で立ちどまつた。すべての女は、男が草掻をもつて土塗れになつてゐるのを見るのが、好きで好きで堪らぬものらしい。婦人はちよつと鼻眼鏡に手をやつて訊いた。

「爺や。御精が出るね。お前こちらのお宅に長らく御奉公してるの。」
「さうですね。もう相應になりますな。」
「こちらはお給金は善いのかい。」
「いや。もうやつと食つてゆかれるだけでさ。一向つまりません。」
園藝服のキチンは、せつせと土を穿くりながら答へた。
婦人は一歩前へ乗り出し、身を屈めるやうにして、
「ぢや、宅へ來たらどう。食べるものの外に、お小遣も上げるよ。」
「有難う。」と麥稈帽はちよつとお辭儀をした。「だが、一生涯こちらの奥様とこに、御厄介になる約束をしてしまつたもんですからね。」
「え、一生涯！　まあ、かはいさうに。」婦人は小皺の寄つた顔をくしやくしやさせた。「そんな約束が何處にあるもんかね。まるで奴隷だわね。」
「さうかも知れませんね。」キチンは土塗れの手をして立ち上つた。「だが、私共ではそれを結婚と申しますよ。奥さん。」

相阿彌と鸚哥

足利義政將軍は、色々結構な物を明から輸入した。織物、陶器、書物――何一つとして珍しくないものはなかつたが、中に一番氣に入つたのは、一羽の鸚哥であつた。
義政の心には、明は夢想鄕のやうに思はれた。鸚哥はそこからの祕密の使者ででもあるやうに、將軍の耳に色々な言葉を囁いた。義政は籠に入れて側を離さず可愛がつた。
だが、鸚哥は女と同じやうに綺麗な羽を持つてゐた。女が飛ぶ事の出來る世の中に、鸚哥が飛んではならないといふ法はない。ある日近侍の小姓が餌を呉れようとすると、鳥は隙を覗つて籠の外へ飛び出した。
義政は鳥を捜し出してもともとどほり籠の物にしない分には、近侍は手打にすると言ひ渡した。その折の將軍の顏は、悲しさと腹立たしさとで、壞れた辨當箱のやうに歪んでゐた。

将軍家の近侍達は、手分けをして八方へ捜しに出た。そして洛中洛外を問はず、木立のある所は、どこにでも立寄つて枝葉を分けて詮索をした。

其邊の軒下や繁みのなかからは、内證話や接吻に夢中になつてゐた雀や山鳩などが、慌てて眞赤な顔をして飛び出したが、肝腎の鸚哥は影さへ見せなかつた。

取逃した近侍は、最早覺悟をきめた體に見えた。そこへひよつくり顔を出したのが、將軍お氣に入りの相阿彌だつた。

「なぜ皆の衆にはそのやうに鬱いでゐられるな。」

近侍は事情を話した。

相阿彌はじつと考へ込んでゐたが、暫くすると、

「醍醐を捜したかな。那處にゐるかも知れぬぞ。」

と、なんだか手懸りがありさうに言つた。

皆は急いで醍醐の山に駈けつけた。そしてあちこちと捜してゐると、はたして鸚哥が見つかつた。鸚哥は廣い世間へ飛び出すには飛び出したものの、何處にも餘り好い事は轉がつてゐないので、また籠戀しくなつてゐた時だつたから、直ぐに手捕りにせられて、もとの將軍家に連れ歸られた。女もかうして一度は世間に飛び出すが、いつかまた古巣に歸つてくるものだ。

義政は相阿彌を呼び出して、どういふ理由で醍醐の山に見當をつけたかと訊いた。相阿彌の答はふるつてゐた。

「宋元の繪を見ますと、鸚哥のとまる樹はいつも同じでござります。なんと申しますのかは知りませぬが、本朝では醍醐にあのやうな樹を見受けますから。」

だから、ふだんから言はない事ではない。畫家は無學では困る。そして鸚哥はまた畫家以上に物識りで、ありふれた樹にとまらぬやうにして呉れなくては困る。

喫煙家

亞米利加の富豪アンドリウ・カアネギイが、この頃或る宴會でした話によると、彼が昨年英吉利に旅をして、とある停車場から倫敦行きの汽車に乘つた時の事、わざわざ喫煙禁止の客車を選んでそれに乘る事にした。

汽車が次の停車場に着くと、肥つた男が一人乘込んで來て、カアネギイの向ひに腰を据ゑるなり、穢れた煙管を取出してぱつと火を點けた。

それを見たカアネギイは注意をした。

「この客車では煙草は喫めませんよ。」

「宜しい。わかつてます。喫みさしを一服やつてしまへば、それでいいんでがさ。」

かう言つて肥つた男は、一服喫み盡してしまつたが、やがてまた安煙草を撮み出してすぱすぱ吹かし出した。

「もし貴君……」カアネギイは少し聲を高くした。「私は御注意しましたね。この客車では煙草は喫めないつて。それにも頓着なくそんなにすぱすぱおやりになると、次の停車場で巡査にお引渡しをするかも知れませんよ。私はかういふ者です。」

と言つて、彼は自分の名刺を出して見せた。

肥つた男はそれを受取つて、懷中にしまひ込んだ。そして相變らず煙を吹かしてゐた。

でも次の停車場に來るとその男は煙草を咥へたまま、碌すつぽ挨拶もせず、他の客車へ移つて行つた。カアネギイは巡査を呼んで一部始終を話し、不都合な今の男の名前だけでもいい、知らせてほしいと賴んだ。

「どうも怪しからん話で。」

巡査はその男の入つた客車の方へ、あたふたと駈けて行つたが、暫くすると、ひどく恐縮した顏をして歸つて來た。そして二度三度カアネギイの前でお辭儀をした。

「いやはや。なんと申上げたものか、實はその方を取調べようとすると、俺はかういふ者だと言つて、この名刺を下さいました。御覽下さい、亞米利加の丸持長者アンドリウ・カアネギイさんですよ。」

流石のカアネギイも、あいた口が塞がらなかつた。名刺は先刻自分が相手に渡したばかりのものであつた。

煙草は煙つぽいものだが、それでも煙草好きには、金持の知らない好い智慧が出ることがある。

出世の祕法

詩人バイロンが華やかな奔放な詩風で、一代の人心――とりわけ若い婦人の心を支配した頃は、歐羅巴の青年達は、みなバイロンの眞似をして、頭の髮を長目にし、おまけにバイロンのやうにわざと跛（びつこ）をひいて歩いたものだ。

安永の老中、田沼主殿頭には妙な好みがあつた。それは銀製の牛を作つて側に置き、閑さへあれば呪文を唱へて、その背を撫でてゐる事だつた。

その呪文の故か、どうかは知らないが、主殿頭は身分不相應に出世して、紀州藩の小役人から老中にまでなつた。それを噂に聞いた當時の人達は、

「あの出世は牛のお蔭に相違ない。なんでも偉くならうと思つたら、牛の背を撫でてやることだ。」

と言つて、牛を拵へて撫でる事が大流行（おほはやり）に流行つた。

なかには主殿頭の向うを張り、大氣張りに氣張つて銀の牛を拵へたものもあつたが、大抵は木で刻み、土で燒いたのが多かつた。そんな輩（てあひ）に限つて、萬一都合よく出世したら、その曉に銀の牛を拵へても遲くはあるまいと思つてゐた。

お蔭で瀬戸物店や彫物師は、牛の註文で懷中を膨らませたのが少くなかつたが、それを撫で廻した人達が、いくたりずばぬけて主殿頭のやうに出世をしたかはわからなかつた。

これはほんの内證事だが、茲にむかしから言ひ傳へた出世の祕法といふものをちよつとお知らせする。それは自分の生れた年から數へて、ちやうど七つ目の干支を繪にかいて、いつも壁に懸けて置くと、立身出世疑ひないといふことだ。むかしからよく七つ目の干支と言ふのは、かういふ理由があるからだ。

だが、七つ目の干支を使つてみても、一向立身しなかつたからと言つて、泣言だけは止し

て貰ひ度い。その時はその時で、また「哲學」といふ善いものがある。「哲學」は此の世で出世をした輩は、皆馬鹿だといふ事を教へてくれる學問である。

哲學者の寄附金

獨逸の厭世哲學者ショペンハウエルが、ある時友達の一人と料理屋に上つた事があつた。この哲學者は、生きてゐるといふことは、唯もう苦痛に過ぎないと言つてゐる癖に、人一倍養生はするし、傳染病が流行り出すと、誰よりも先に住んでゐる市を逃げ出した程、自分の身體を大切にしたものだ。だから料理屋に上つて、贅澤な皿を註文したからといつて、別段咎め立てなどをしないやうにして貰ひたい。

見ると、直ぐ側の卓子に、おしやれな青年士官が三四人居合はせて、軍鷄(しやも)のやうに胸を反らし、きいきいした聲で何か頻りとはしやぎ散らしてゐた。

厭世哲學者はそれを聞くと、顏に癇癪筋をおつ立てて、苦り切つてゐた。友達は此の哲學者が平素から女と騷々しいのとが大嫌ひなのを知つてゐるので、ひとりでやきもきしてゐたが、そんな事に氣を兼ねる程の青年士官ではなかつた。哲學者は冷い眼でじろじろ隣席の軍鷄を睨みつけてゐたが、何を思つてか懷中から金貨を一つ取出して、かちんと卓子の上に置いた。

哲學者は言葉すくなに、友達と向き合つたまま、幾皿かの料理を平げてしまふと、先刻卓子に置いた儘の金貨を取上げて、また懷中にしまひ込んでしまつた。それを見た友達は理由を訊かないでは濟まされなかつた。

「君、その金貨はどうしたんだね。先刻から訊かう訊かうと思つてたんだが、まさか何かのまじなひぢやあるまいね。」

「まじなひぢやない。寄附金さ。」

哲學者はいつもの皮肉な調子で言つた。

「僕は今時の士官が、女と馬と進級の事以外に、なんでもいいから談話をするものがあつた

ら、喜んで此の金貨を慈善事業に寄附したいと思つてたんだがね……」

と、またしてもじろりと佩刀を下げた軍鷄の方を見かへつた。

「ところが、奴さん達、お聞きの通りの始末で、とんと僕を慈善家にする機會を與へて呉れなかつたよ。」

天神様の子供衆

一體地獄にはどれ程の人數がゐる事だらう。——僧侶や牧師が、人を罪人扱ひにするお說教を聽く度に、誰でもがこんな考へを起すものだが、それに就いて一六六六年頃或る獨逸人が詳しく書いた事があつた。

なんでもその說によると、地獄にはその頃人間がすべてで四千八百六十六萬六千三百二十二人ゐた事になつてゐる。太古からその年代までの人數を數へ立てたなら隨分な數に上るだ

らうが、その殘りが皆天國にゐるとすると、神様のお裁きも、かなりいい加減なものと言はなければならない。それにしてもその獨逸人が、どんな方法で地獄の人口調査をやつたかはその女房すら知らなかつたといふ事だ。女房に知らさないで何かしら出來る亭主がゐたら、それは偉い男で、この意味において件の獨逸人は英雄である。

むかし寶曆の頃、江戸に菅大助といふ書肆の主人がゐた。ひどい歷史好きで、自分でも書を著はしたが、菅原道眞の傳記を書く段になつて、この人には二十四人も子供がゐて、その中で名前が知れてゐるのは五人しかないのをひどく氣に病んだものだ。

道眞にしても、世間の手前もあらうものを、二十四人とは少し產み過ぎたやうだ。この人は夙くから書をかいたり、詩を詠んだりしてゐたさうだが、外の方面にも相應早熟だつたものと見える。大助は殘りの十九人の名前を調べ出さなければ濟まないとでも思つたものか、色々な書を涉獵つてみた。だが、多くの大切な事を搜す場合と同じやうに、書には何一つ書いてなかつた。

大助はたうとう善い事を發明した。それは狐憑きを呼んで來て、神下しをかけて、一々名

前を訊き出すといふ事だ。大助は狐憑きの言ふがままに、ちやんと十九人の名前を書きとめたものだ。それを聞いた塙撿校は、

「人間に判らぬ事が狐に判らう筈がない。」

と言つて、鼻の上に皺を寄せて笑つたさうだが、それは撿校が間違つてゐる。人間に判らぬ事は、神様や狐に聞くべきで、神様が名代の沈默家であるからには、狐にでも聞かなければ仕方がない。唯狐がたわいのない嘘吐きであるのは、人間の拵へた古記錄とおつつかつつである事をさへ知つてゐれば、それでいいのだ。

女優と監督

以前何かの折に、ちよつと引合ひに出した事のある米國の劇場監督チヤアルズ・フロオマンは、おそろしいやかましやで、相手が誰であらうと、自分の指圖に從はないものは、手嚴

しくやつつけるので名高い男だ。

いつだつたかも、ある劇の稽古をつけてゐる時、女優の一人に、科(しな)がどうしてもフロオマンの氣に入らないのがあつた。それはパトリツク・カムベル夫人といふ女優で、雞のやうな甲高い調子を持つた女だつた。

フロオマンは眉を顰めてカムベル夫人を見た。夫人は雞のやうに胸を反らして舞臺を歩き廻つてゐた。

「カムベルさん。何といふんです、貴方の藝は。てんでお話にならないぢやありませんか。」

フロオマンは情なささうに言つた。

夫人はその折、役に同化した積りで、すつかり好い氣持になつてゐたので、フロオマンの批評を聞くと、眞蒼になつてぶるぶると肩を顫はせた。暫くは舞臺の端に立つて、鉛筆のやうに眞直ぐになつてゐたが、急に靴音を蹴立ててフロオマンの前へ出て來た。

「なんだとおつしやるんです。フロオマンさん。てんでお話にならないんですつて、私の藝が。ちよいと申上げて置きますが、私かう見えても藝術家なんですからね。」

夫人は眼一杯に涙ぐんで、きいきいした聲で我鳴り立てた。

フロオマンは苦り切つた顔をして外方を向いてゐたが、夫人の聲が途切れると、だしぬけに牛のやうな聲を張上げた。

「夫人、貴女が藝術家ですつて。これは初めて伺ひました。結構な内職をお持ちですね。世間へは精々内證にして置きませうね。」

夫人は息がつまつたやうな顔をして、そのまま舞臺を駈け下りてしまつた。

華盛頓は死んでゐる

亞米利加の國會議員にタルボットといふ男がゐる。何かとんでもない失敗でもしなければ滅多に他人に名前を知られさうにもない男だが、幸福な事には一つ失敗譚を持つてゐる。

この男が、先日ヴアジニアのヴアノンが岡に住んでゐる一人の友達を訪ねようとして、馬

車旅行を企てた。ヴアノンが岡といへば、誰もが知つてゐる通り、亞米利加の國祖ワシントンが長く住んでゐたところで、タルボットの友達は、なんでもその近くに家を構へてゐるといふ事だつた。

すべて名所舊蹟の近くに住居を構へるといふ事は、自分にとつては兎も角も、訪ねて來るお客達にとつては分り易くて便利なものだが、生憎タルボットは、從來一度も國祖の舊棲を訪ねた事がないので、ちよつと方角が立たなかつた。さうかといつて自分の行く先を馬に訊く事も出來なかつた。大抵の場合は馬は主人よりも悧巧なものだが、タルボットの馬は、多くの議員達と同じやうに餘り物を識らなかつた。

ところが、都合よく學校歸りの子供が一人そこを通りかかつた。タルボットは車の上から訊いた。

「ちよいと坊や。お前ワシントンのお家を知つてるかい。」

「知つてるよ。」

子供は圓まつちい顔をあげた。

「ぢや、小父さんに教へておくれ。」

議員はほつとしたやうな顔をした。

子供は自分の今來た方角を指さした。

「これを眞直ぐにお行きよ。さうすると自然にワシントンのお家の前へ出ら。」

「有難う。坊やは善い兒だね。」

と、タルボットは資本のかからない愛嬌笑ひを見せて、馬に一鞭あてた。馬は急にワシントンとは昔馴染だつたやうな顏をして、勢よく駈け出さうとした。

「小父さん。」子供は後を見送りながら呼んだ。「そんなに急がないで、ゆつくりお行きよ。ワシントンはもう死んぢやつてるんだよ。」

子供といふものは、正直な事を言ふものだ。

元帥の諧謔

元帥ジョッフルが、佛蘭西の軍事委員として、幕僚を引連れてつい先日米國へ渡つた事があつた。その折夥しい歡迎人の中から、生粹の米國生れと思はれる一人の貴婦人が、つかつかと一行の前に出て來た。

男がたんと竝んでゐる場合に、女が先づ言葉を掛けるのは、その中で一番若い男ときまつてゐるものだ。貴婦人は一行の中から若い將校を搜し出して言葉をかけた。

「つかないことを訊くやうですが、戰爭では貴方も獨逸人を幾人かお殺しになつて？」

「はい。五人ばかしやつつけましたよ。」

若い佛蘭西の將校は、米國婦人のだしぬけの質問にいくらか氣味を悪がりながらも、自慢さうに言つた。

貴婦人はそれを聽くと、飛びつくやうにして、ひしと男の右の手を握つた。若い將校の五本の指は溫かい女の掌の中で小鳥のやうに顫へてゐた。女は嬉しさうに訊いた。

「ちよいと、このお手なの、獨逸人を殺したとおつしやるのは。」

「まあ、そんなものでせう。」

と、若い將校はどぎまぎする胸を押鎭めながら、わざと氣取つた物の言ひやうをしてみたが、氣の早い米國の婦人はそんな事は少しも耳にとめないらしく、いきなり男の右の手を持ち上げたかと思ふと、それを自分の唇に當てて、幾度か熱い接吻をした。

「まあ。名譽なお手だこと……」

暫くして婦人は手を離しながら言つた。

若い將校は、嬉しさにとりのぼせながら、今一つの左手では百人も獨逸人を殺したらしい顏をして、手先をもじもじさせてゐた。

側に立つてゐたのは、ほかならぬジョッフル元帥だつた。元帥は激しい獨逸軍の攻勢にもびくともしなかつたあの落着いた態度で、この場の容子をじろじろ見てゐたが、貴婦人が引

上げてしまふと、若い將校の方へのつそりと向き直つた。

「馬鹿め。あんなに接吻までして吳れようといふんだ。なんだつて私は獨逸人を此の口で嚙み殺しましたと言はなかつたんだ。」

ラムの祈禱

佛教信者は食事をする時、先づ飯を一箸とつて佛に供へる事を忘れない。耶蘇教信者はまた食卓につくと、吃度感謝の祈禱をする。どちらもほんたうに結構な心掛だが、かう諸式が高くなつては、多くの人の食卓は、これが神樣の下された物だらうかと、怪しまれるやうに見窄らしくなつて來る。神樣にしても、こんな事くらゐで三度々々さう禮を言はれては、なんだか面當てがましく聞えない事もなからう。

シエエキスピア物語で日本人にもよく知られてゐるチヤアルズ・ラムが、ある時多くの知

合と一緒に、誰かの晩餐に饗ばれた事があつた。皆が食卓につくと、主人役は、

「ラムさん。」

と言つて、多くの客の中からシエエキスピア物語の著者を呼んだ。

「恐れ入りますが、食前のお祈りを貴方にお願ひしたいものですな。」

ラムはたつた今その晩の招待のお禮を主人に言つたばかりの所だつた。この上神様にも言はなければならないものなら、それには牧師といふ恰好な人があつた。牧師といふものは、平素から自分の言ふ事だつたら、どんな不機嫌な折でも(よしんば齲齒が痛んでをらうとも)神様はきつとお聽き入れ下さると言ひ言ひしてゐるものだ。

「牧師さんはいらつしやいませんか。」

ラムは多くの客の中から牧師を搜した。牧師は先刻までその邊に居合はせたが、神様に內證話でも出來たかして、ちよつと次の室にたつた所だつた。

「牧師さんは、あちらで御用をしていらつしやるやうですから、やはり貴方にお願ひしませう。」

主人役はかう言つて催促した。

「それぢや、私がいたしませう。」ラムは頭を下げた。「神様。今晩はどうも有難うございます。兎も角もお禮を申しておきます。」

生き鬚

むかし中國邊の或る城下に、大層鬚の立派な町人が住んでゐた。晝は店先に坐つて街を通る人達に自慢の鬚を見せつけるのを何よりの道樂とし、夜になると鬚の夢ばかり見てゐた。

さういつた風に、あまり鬚を大事にし過ぎるので、自然仕事の方は疎かになつて、店は寂びれる一方だつた。

「かう不景氣ぢや迚もやりきれない。」

その男は長い鬚を扱いて、溜息を吐くばかりだつた。

そこの殿様は大の能樂好きで、丁度その頃面師に言ひつけて、能の面を拵へさせてゐた。

「面に植ゑつけるのに、誰か恰好な鬚を持つてゐないものかしら。」

殿様は面師に相談をした。面師はそのとき例の町人の事を思ひ出したので、あの鬚だつたら申分があるまいと答へた。

殿様は家來に面師を連れさせて、町人の許へ示談にやつた。

「殿の仰せぢや。お前の鬚が賣つて貰ひたい。代りに三十兩遣はすから……」

「三十兩。」町人は胸で算盤を彈いた。逼塞した身には、三十兩といふ纏まつた金は有難かつた。だが、錢金には替へ難いと思つて來た自慢の鬚である。町人は自分を納得させるのに何よりも好い料柄を見つけた。

「殿の仰せと承りますれば、惜しい鬚ではござりまするが、御用にお立て申しませう。」

町人はかう言つて、剃刀を取出して自分の鬚を剃り落さうとした。

「待たつしやれ。」面師は押留めた。「剃り落したのでは、鬚が死鬚になつてしまひまする。」

町人は剃刀を持つたまま、魚のやうな愚かな眼つきをしてゐた。面師は包からお誂への面

を取出した。そして、

「かうしてお讓り受け申すのぢや」

と言つて、一本一本引つこ抜いて面に植ゑつけた。

町人は鬚を拔かれる度に、齒を食ひしばつて泣顏をした。そして自分で自分を納得させるために、

「何事も殿の仰せでござるから……」

と、大きな掌で額の汗を拭いた。

作り鬚

赤穗の儒者赤松滄洲は、學者には惜しいほど堂々たる顏をしてゐた。なかにも鬚は素晴しく立派で、自分にも大分それが自慢らしく、

「どうぢや、日本一の鬚ぢやぞ。」

と、人の顔さへ見ると、長い鬚をしごいて見せたものだ。

ある日の暮れ方、滄洲がいつものやうに緣端で鬚を扱いて好い氣持になつてゐると、そこへ恰幅の立派な爺さんが訪ねて來た。ついぞ見知らぬ顔だが、その鬚を見ると、流石の滄洲も吃驚した。長さは三尺にも餘らう、銀のやうな白さで、扱くと音がしさうに思はれた。

滄洲はさつと顏色を變へた。爺さんはそれを尻目にかけて座敷に上つたが、初對面の挨拶が濟むか濟まないうちに、もう聲を張上げて色々世間話を始めた。

滄洲はそれが癪にさはつてならなかつた。なんとかして高飛車に出てやらうと、幾度か下腹に力を入れてみたが、その都度爺さんが自慢さうに扱いてゐる銀のやうな長い鬚が目につくので、たあいもない詰らぬ事を言つてしまつて、吾ながらはつとした。

爺さんはいい加減に氣焰を上げて座を立つた。

「何しろ立派な鬚だ。」

滄洲は肚の中で鬚のことのみを思ひながら、勢のない顏をして玄關まで見送りに立つた。

沓脱に立つた爺さんは、ちよつと頤に手をやつたかと思ふと、さつと鬚を脱して片手に持つた。そして肩をそびやかして歸つて行つた。

「ぢや、作り鬚だつたのか。」

滄洲は覺えず口走つた。そして今まで忘れてゐた自分の鬚を握つて、拂子のやうに振つてみたが、もう間に合はなかつた。

牡蠣を食ふ馬

ベンヂヤミン・フランクリンが、ある冬馬に乘つて田舍に旅行をした事があつた。雪の多い頃で夕方田舍の旅籠屋に着いた頃には、馬も人も砂糖の塊のやうに眞白になつてゐた。

フランクリンは馬を小舍に繫いで、入口に立つて外套の雪を叩き落した。

「おう寒い、寒い。靈魂までがすつかり凍つてしまひさうだ。」

獨言を言ひ言ひ内に入つて來た。見ると、煖爐の周圍には先客がどつさり寄つて集つて、火いきれに火照つた眞赤な顏をして、何かがやがやと話をしてゐた。そしてフランクリンが寒さに顫へてゐるのを見ても、誰一人席を讓つて呉れる者もなかつた。

フランクリンは氣まづさうな顏をして隅つこの椅子に腰を下した。そして亭主を呼んだ。亭主は玉葱の匂ひがぷんぷんする掌を揉みながら入つて來た。

「へい、いらつしやいまし。何か御用でございますか。」

「うむ。馬を小舍に繫いで置いたから、急いで牡蠣を一升やつてくれ。」フランクリンはかう言つてかじかんだ掌で額を撫でまはした。「殼のまんまでいいよ。殼は馬が自分で取つて食べるからね。」

「馬の飼葉に牡蠣をやつてくれ。」――それを聞いたお客達は、今まで話してゐた世間話を止めて、一齊に此方を振向いた。そして亭主が臺所から牡蠣の一升がとこをもつて、馬小舍に出掛けたのを見ると、

「一體どんな馬だらう、牡蠣を食ふつてのは。」

と、好奇心に充ちた眼を光らせながら、どやどやと後から蹤いて行つた。

フランクリンは、隅つこの椅子を立つて煖爐の側へ行つた。そして好い氣持に手足を擴げて、靈魂が息を吹きかへすまで暖まつた。

フランクリンめ。平素から人間は正直でなくつちやならぬと言ひながら、寒いとついこんな嘘を平氣で言つてのけてゐる。だが、眞實のところ、嘘一つ吐けないやうな碌でなしではとても正直者にはなりかねる。

尻と腹

土筆が二本立ちで春先の燒野から頭を擡げるやうに、偉い主人は吃度秀れた家來を連れて出るものなのだ。熊本の名君細川靈感公の家來に、堀勝名がゐたのも丁度それである。

それまで熊本には罪人を取扱ふのに、死刑と追放と、この二つしか無かつたのを、勝名の

考へで笞刑と徒刑とがその外に設けられる事になつた。笞刑は言ふまでもなく、尻つ邊を叩くので、それに用ひられる笞が新しくととのへられた。

だが、勝名はその笞で罪人の尻つ邊を幾つ叩いていいものか見當がつかなかつた。その時分熊本の城下には、叩しつけていい尻はどつさり有つたかも知れないが、他人の身體では肝腎の痛さは判らなかつた。

そこで勝名は自分の尻を叩く事にきめた。ある家來の子供にしこたま御馳走をふるまつて上機嫌になつた時、大きな尻を捲くつてその鼻先に突きつけた。

「さあ、その笞で思ひきり叩しつけてくれ。」

子供は狸をとつちめるやうな積りで、強く尻つ邊を叩きつけた。勝名は顏を顰めながら、

「さ、も一つ氣張つて叩いた……」

と言つて、肌が紫色に脹れ上るまで笞を續けさせたといふ事だ。

流石は勝名で、思ひつきが面白いが、然し眞實の事を言ふと、他人の尻で濟む事なら、自分の尻は成るべく叩かぬ方がよい。これを一番よく知つてゐるのは發明家のエディソンであ

つた。

エディソンは今日まで色々の事を發明したが、その才能は早くも子供の時から現れて、丁度七歳の頃、學校教師から袋に瓦斯を盛ると風船が出來ると聞いて、早速それを試してみようと思つた。

エディソンが風船の材料として選んだのは、八歳になる自分の友達だつた。この小發明家は友達に沸騰散をしこたま飲ませておいて、後から冷水をぐつと一杯煽飲らせた。

エディソンの考へでは、かうすれば友達の腹に瓦斯が一杯詰つて、風船のやうに地面からすつと持ち上るに相違ないと思つてゐたのだ。——が、いつまで待つても、友達は持ち上らなかつた。

「こんな筈ぢやないんだがなあ。」

小發明家は失望した顏をした。

だが、お蔭で友達の腹のなかは雷のやうに鳴り出したに相違なかつた。えて無益な事ばかり書きたがる歴史家は、この小さな腹の出來事については、何一つ書き殘してゐない。

魚の骨

京都の智恩寺といへば、ことわるまでもなく淨土宗の大本山である。そこの三十九代目の住職に、萬靈上人といふ大津生れの名高い僧侶さんがゐた。なんでも三十八年の間引續いて住職を勤め、延寶八年とかに九十二で亡くなつたといふから、隨分達者な僧侶さんだつたに相違ない。

この僧侶さんが亡くなる五六年前の事だつた。ある日寺男を指圖して庫裏の床下を掃除させたものだ。どこの家でも床下には色々の祕密がある。金の茶釜を掘り出したり、野良猫の隱し兒を見つけたりするのは大抵が床下で、もしか床下に何一つ落ちてないやうな家があつたなら、そこの祖先は落す程の物を持合はさなかつたので、こんな氣の毒な事はない筈だ。

在方の床下にあるものが、寺方の床下に無いといふ法は無い。智恩寺の床下からは、つい

こなひだ食べ荒したばかりの魚の骨がどつさり出た。

「てつきり納所坊主のしだらに相違ない。お上人樣のお目に懸けなくつちや。」

寺男はその魚の骨を拾ひ集めて、上人の居間に入つて行つた。

上人はそれを見て變に顏を歪めてゐたが、暫くすると、

「どうも、今時の若い奴は根氣が弱くていかんな。」

と、獨言のやうに言つた。

「眞實でございますよ。お坊さんの癖に、こんな物まで啄つくなんて。お上人樣方のお若い時分には、ほんたうに不味い物ばかし召上つてたぢやありませんか。」

寺男がぶつぶつ呟くのを、上人は掌で押へつけるやうな眞似をした。

「いやいや。そんな積りで言つたのぢやない。わしの若い時には、骨など食べ殘すやうな事はしなかつたと言うたまでぢや。」

三十六計

むかし元祿の頃に、大野秀和といふ俳人がゐた。同じ仲間の寶井其角が自分の事を悪し様に噂をしてゐるといふ事を聞いて、大層腹を立てた。

「其角の奴め。一度ひどい目に會はして呉れなくつちや。」

秀和は俳諧こそ其角よりは下手だつたが、以前が武士だつただけに、腕つ節はずつと太いのを持ち合はせてゐた。

其角は秀和が大層腹立つてゐる噂を聞いて、成るべく出合はぬやうに氣をつけてゐたが、ある日の事間が悪く兩國橋の上でばつたりと行き合つた。講釋師の話によると、其角が煤竹賣りの大高源吾に出合つたのも、やはり兩國橋の上だつたといふ事だから、其角といふ男は閑さへあれば兩國橋の上をうろうろしてゐたものと見える。

目ざとい秀和は其角の姿を見遁さなかつた。

「おい、其角、お前はなんださうだね。近頃方々で乃公の事を悪し様に言ひ觸らして歩くさうだが、それは眞實だらうね。」

秀和の言葉は初めから喧嘩腰だつた。

「眞實だよ。眞實だつたらどうする。」

其角は喧嘩を買つて出た。

「果合ひをするまでさ。」秀和は刀の柄に手を掛けて、二足三足詰め寄つた。「そんな噂を觸れ歩くからには、お前にも覺悟があるだらうから、さあ勝負をせい。」

「無論勝負をする。」其角はきつぱりと言ひ放つた。「乃公も男だ。いつでも相手になつてやるが、暫くの間待つてくれ。支度をしなくちやならんからな。」

其角はかう言つて、ぽつぽつ裾を端折り、雪駄を脱いで帶に挿んだかと思ふと、

「さあ來い……」

と言つて、そのまま後をも見ずに、一散に駈け出してしまつた。

長い紐

女といふものは、何によらず長過ぎる物が好きだ。むかし或る詩人は友達にやる手紙に、「今日は心が忙しいから、不本意ながら長い手紙を書く。」と斷つて、手紙の長いのを恥ぢたものだが、女にそんな氣の利いたことは解らない。女は手紙の文句が長くさへあれば、相手の男を親切者だと思ひとつてしまふ。

白河樂翁公が老中を勤めてゐた頃、大奥の女中仲間に煙草盆に緋の紐をつける事が流行つた。女の好みだけに紐は煙草盆をぐつと差上げても、まだ疊の上を曳きずるほど長かつた。

樂翁公はそれが氣になつてたまらなかつた。ある日の事、老女の一人を呼び寄せた。老女は狐のやうに長い尻つ尾を持つてゐさうな女だつた。

「ほかでもないが、あの煙草盆の紐だね。」樂翁公は言つた。「あんな物をぶら下げてゐたところで、なんの役に立つといふぢやなし、いつそ廢めたらどんなものかね。」

老女は石のやうに冷たさうな顔を上げた。

「これはまた以ての外のお言葉かと存じます。御老中様には御存じないかも知りませぬが、あの紐と申しますのは、徳川のお家の長いのを壽ぐ(ことほ)ために、長目に致してございますので、唯今のお言葉を伺ひますと、まるでお家が早く滅びましても……」

「もうよい。解つた、解つた。」

樂翁公は顔を顰めて手をふつた。長い物好きな女の哲學には、流石の政治家も手を引込めてしまつた。

ほととぎす

(ほととぎす)

むかし連歌師の紹巴が、松島を見に仙臺へ下つた事があつた。仙臺のお城では、目つかち

の政宗公が夏の日の長いのに焦れて、獨りで癇癪を起してゐるところであつた。

ある日の事、政宗公は家老の片倉小十郎を呼んで何か打合せをした。

その翌日、紹巴は御城内へ呼び出されて殿様にお目にかかつた。政宗は氣難しい顏を強ひて捩ぢ曲げるやうにして、ちよつと笑つて見せた。

「紹巴か。よく參つて呉れたの。徒然の折ぢや。今日は連歌の話でもして呉りやれ。」

時が來ると田螺も鳴く事を知つてゐる連歌師は、目つかちの殿様が歌を詠むといつても、格別不思議には思はなかつた。それに歌詠みだの、俳諧師だのといふ輩は、人殺しの口からでもいい、相手が自分と同じ風流人である事を聞くのを、何よりも嬉しく思つてゐるものなのだ。

ちやうど時鳥の啼く頃で、庭には青葉がこんもりと繁つてゐた。政宗はお產でもするやうに蟹のやうな顏をしかめてうんうんと唸つてゐたが、暫くすると、

「啼け、聞かう、身が領分のほととぎす。」

と詠んで、得意さうに書きつけた。

脇は片倉小十郎がつける事になつた。小十郎は兩手を拱いて考へ込んだ。身體のどこかを時鳥が矢のやうに飛んでゐるやうに思つたが、どうしてもその尻尾を捉へる事が出來なかつた。で、やつとこさで、

「啼かずば默つて行け、ほととぎす。」

とつけて、紹巴の方へ廻して來た。

紹巴は發句から讀み下してみると、殿様も家老も一羽づつ「ほととぎす」を飛ばしてゐるのにはちよつと驚いた。ままよ、もう一羽飛ばしてやれといふ氣になつて、

「どうなりと御意にしたがへ、ほととぎす。」

とつけて、何喰はぬ顏で政宗の方へ押しかへした。

殿様と家老と連歌師と、各自の境遇が思はれるやうな三人三様の詠み風は面白かつたが、それよりも面白いのは、その日に限つて時鳥が啼かなかつた事だ。もつと正直に言ふと、時鳥がゐなかつた事である。

天文學者

サヴ・ロバアト・ボオルといへば、愛蘭生れの名高い天文學者で、劍橋大學でその方の講座を受持つてゐる先生だが、いくら天文學者だからといつて、木星から高い生活費を受取る譯にもいかないので、晝飯は精々手輕なところで濟ませる事にきめてゐる。

ある時、久振りに舊い友達が訪ねて來たので、天文學者は滅多に行きつけない土地一番の料理屋に連立つて行つた。そして初めから終ひまで彗星の話をしながら、肉汁を飲んだり、ビフテキを醬つたりした。すべて學者といふものは、自分の專門の話をしなければ、どんな料理を食べても、それを美味いと思ふ事の出來ないものなのだ。

料理が濟むと、主婦は勘定書を持ち出した。天文學者はじつとその〆高を見てゐたが、暫くすると望遠鏡を覗く折のやうに、變な眼つきをして主婦を見返つた。

「主婦さん、僕はここでちよつと天文學の講釋をするがね。すべてこの世界にある物は、二千五百萬年經つと、また元々通りに還つて來るといふ事になつてゐる。してみると、僕も二千五百萬年後には、やはり今のやうにお前さんの店で午飯を食つてゐる筈なのだ。ところで物は相談だが、この勘定をそれまで掛にして置いては臭れまいかね。」

「ええ、ええ、よござんすとも。」と主婦は愛想笑ひをしながら言つた。「忘れもしません。丁度今から二千五百萬年以前にも、旦那は今日のやうに手前共の店でお午飯を召上つて下さいましたが、その折のお勘定が唯今戴けますなら、今日のはこの次までお待ち致しませう。」

天文學者は呆氣に取られて、笑ひながら錢入を取出して勘定を拂つた。成程錢入を見ると二千五百萬年も前から持ち古して來たらしい、手垢のにじんだものであつた。

攝津の蘆屋に老齢の夫婦者が住んでゐる。神戸にゐる息子の仕送りで、氣樂に日を送つてゐるが、こなひだからふとした病氣で媼さんが床に就いた。

「お爺さん。わたい貴方を見送つてから死ぬのが順當やとそない思うてましたんやけどな……」

媼さんは枕もとに坐つてゐる爺さんの手を取つて泣いた。手は何方も皺くちやだつた。

「もう迎もあきまへんよつて、お先へ遣つて貰ひまつさ。」

爺さんは水洟と一緒くたに涙を啜り込んだ。涙も水洟も淡水のやうに味がなかつた。

「そない短氣な事言はんと、矢張りわしを見送つてからにしといてえな。」

爺さんはやつとこれだけの事を言つた。

媼さんは頭をふつた。智慧の持合せの少かつたのを、六十年この方使ひ減らして來たので頭の中では空壜を振るやうな音がした。

「あきまへん。とてもあきまへんよつて、お先へ行かしとくなはれや。そしてお爺さんは後からゆつくりおいなはれ。」

「しきり病人の咳きあげるのを、爺さんはうしろから背を撫でてやつたりした。

「そない言はんと、せめて秋まで延ばしなはらんかいな。そのうち千日へでも行つて、おもろい奇術を見てからにでもしたらどうや。」

爺さんは自分が何よりも手品が好きだつたので、お名殘りに媼さんと一緒にそれが見たかつたのだ。

媼さんは手をふつた。

「そない言うとくんなはるのは嬉しうおますけど、お爺さん。私やつぱり行きまつさ。」

まるで他人に立聽きでもされるのを氣づかふやうに、干からびた口を爺さんの耳へ持つて行つた。

「この節は筍の出盛りやよつて、値が廉うおまつしやろ。お供養しなはるのに安上りに出來まんがな。」

「成程筍が廉い。それもそやなあ。」爺さんはじつと胸算用をするらしかつたが、考へてみると、筍よりも矢張り媼さんの生命の方が高かつた。

「いやいや、やつぱり秋まで延ばしなはれ。」

「筍が廉いから今のうちに死にたい。」――倹約な商人の媼さんを、これ程よく現してゐる言葉はまたと有るものではない。それもその筈さ、媼さんといふ媼さんは、若い頃、

「絹物が廉くなつた。娘を嫁けるのは今のうちだ。」

と言つて、年齢頃には頓着なく、衣裳の安いのを標準に嫁けられた大阪女だからである。

審判の日

最後審判の日――といふと、耶蘇教では一番やかましい日で、これまで懶けてばかしゐた神様が、むつくり起き上つて、區裁判所の判事のやうな氣難しい顔をして、人間の裁判をする日なのだ。その日取りはもうちやんときまつてゐて、教會の牧師のところまでは内々知らせて來てあるらしいが、牧師の考へでは、それを發表してしまふと、一度に善人が殖えるので、その前日までは知らぬ顔で伏せて置く積りらしい。何故といつて一度に善人が殖えると牧師は何よりも好きな説教が出來なくなるのだから。

アアギン・コツブといへば、米國で聞えたジヤアナリストだが、この男が或る日教會へ行くと、牧師は例の「最後審判の日」といふ演題で長つたらしい説教をしてゐた。牧師は聖書の文句を引いて、この日の朝喇叭が高く鳴ると、あらゆる國のあらゆる時代の人間が、皆神の聖座の前に引出されて、現世で爲て來た行爲について、嚴しい裁きを受けなければならぬ筈だと説いた。

説教が濟むと、聽衆の一人が立ち上つて牧師に訊いた。

「先生。その日になると、人間殘らずが、神様の前に引張り出されるとお言ひになりましたが、それはほんたうなんですか。」

「さうですとも。」

牧師は判りきつた事のやうに言つた。

「それぢや、カインとアベルも其處に居ますね。」

「無論です。」

「ダビデとゴライアス。――あの二人も居ませうね。」

「居ませうとも。聖書にちやんと書いてありますよ。」

牧師は女のやうな繊細な手で、革表紙の聖書をとんと叩いた。

相手の男は面白くて堪らぬやうに、にこにこしながら問を續けた。

「クロムウエルとチヤアルス一世。――あの二人も居るでせうね。」

「居るでせうとも。たしかに居る筈です。」

「ナポレオンとウエリントンも一緒に居る筈ですね。」

「居る筈です。多分打揃つて神様の前へ引出されるでせう。」

「面白いぞ。」その男は自分が教會の中に居るのを忘れたやうに大聲を上げて喜んだ。「そんな輩がうんと居るんだもの、僕等の順番にはなかなか廻つて來ないや。」

食べ方

藤田東湖は貧乏だつたから、酒のよいのが何よりも好物であつた。（内證で言つておくが、すべて富豪といふものは、貧乏人とは反對に、酒のよくないのを好くものなのだ。）で、その良い酒を飲みたいばかりに、頼まれると、蕎麥屋の看板だの石塔だのを平氣で書いた。書の相場は酒を標準に、一本一升といふ事にきめてゐた。

東湖は酒徳利を座敷の本箱の中へこつそり忍ばせておいて、箱の蓋には生眞面目に李白集と書いておいた。實際李白集があつたら、質に入れて酒に替へかねない程の男だつた。

酒の肴には、やつこ豆腐か松魚の刺身かがあつたら、猫のやうにところころ咽喉を鳴らす事が出來た。水戸には未だに東湖の模倣者も少くない事だから、さういふ人達にとつて、東湖が鰹節が好きだと言はないで、やつこ豆腐で辛抱したのは、どれだけ幸福だつたかも知れな

い。これにつけても追隨者を成るべくどつさりもちたいものは、食物も精々手輕なところを選ばねばならない事になる。

實をいふと、東湖はやつこ豆腐よりも、まだ鰹の刺身の方が好きだつた。好きなだけにそれを食べるのに、自分獨得の方法を發明してゐた。それは一つづつ箸で撮む代りに、皿を掌に載せて猫のやうに舌の先でぺろぺろ嘗め込んでしまふといふ藝當である。

京都大學のS博士は、蜜柑を食べるのに、人と異つた食べ方をする。それは指先で皮を剝かないで、蜜柑を掌に載せておいて、前齒でそれに齧りつく。そして出來た齒痕に指を突込んでそろそろ剝いて行くといふ遣り方である。

人はそれぞれ自分の哲學を持つてゐる。自分の食べ方が他人のと異つてゐるといつても、別段顏を赧うするには當るまい。

氣轉

ビスマルクが或る時仲善しの友達と連立つて、獵に出掛けた事があつた。すると、どうした機みか、友達は足を踏み滑らして沼地に陷つた。

友達は慌ててビスマルクを呼んだ。

「君、お願ひだから僕を捉まへて呉れ。さもないと僕は沼地に吸ひ込まれてしまふ。」

ビスマルクは大變な事になつたなと思つたが、强ひて平氣な顏をしてゐた。

「馬鹿を言ふない。僕が其處へ飛び込んで見ろ。一緒に吸ひ込まれてしまふばかりぢやないか。もうかうなつちや、とても助かりつこはない。君がいつまでも苦しんでるのを見るのは僕もつらいから、一思ひに擊ち殺してやらう。」

ビスマルクは、平氣な顏で身動きの出來ない友達に狙ひをつけた。

「おい。じつとしてゐないか。的が狂ふぢやないか。僕は一思ひにやつつけたいから、君の頭に狙ひをつけてるんだよ。」

ビスマルクの殘酷な言葉に、友達はもうぬかるみの事など思つてゐられなかつた。なんでも相手の銃先から遁れたい一心で、死物狂ひに跪いてゐるうちに、古い柳の根を見つけて、

それに縋つてやつとこさで這ひ上る事が出來た。

ビスマルクは笑ひ笑ひ銃を胸から下した。その落着きが自分を救つたのだなと氣づいた友達は、

「有難う。有難う。」

と溝鼠のやうな身體をして、兩手を擴げて相手に抱きつかうとした。ビスマルクは慌てて逃げ出した。

「もういい。もういい。そんな樣をしてお禮などには及ばんよ。」

避暑法

むかし、有馬侯の下屋敷が品川にあつた。海に臨んだ結構な普請で、欄干なども朱塗の氣取つたものであつた。

ある夏の土用に、寶生太夫が親子打揃つて、この下屋敷へ暑氣見舞に上つた事があつた。土用の最中だといふのに、座敷には蒲團が天井にとどきさうに高く積んであつた。よく見ると、その上に殿が裸のまま胡床をかいてゐた。全くの素つ裸で、たつた一つ紅絹の褌を締めてゐるだけだつた。

寶生太夫は可笑しくて堪らなかつたが、笑ふわけにもいかなかつた。すると給仕の女が、黑塗に金蒔繪をした七つ梯子をかけて、蒲團の山へ上つて行つた。そして寶生が暑さ見舞に來た由を申述べた。

有馬侯は蒲團の上から剽輕な顏を覗かせた。

「寶生か。よく參つたの。こんな高い所にゐても、今日は殊の外暑い。ま、ゆるりと休息してまゐれ。」

と、笑ひながら言つたさうだ。

つまり他人よりか一段高いところにゐるといふ事だけで、少しは涼しい積りらしい。してみると、避暑にも色々流儀がある。

斜視

米國の副統領マアシヤルが、先日議會の入口で寫眞師二人に呼びとめられた。相手は何れも新聞社の寫眞師であつた。

「閣下。少し右の方へお向き下さい。」

と、一人の寫眞師が言つた。すると、今一人の寫眞師は、

「どうぞ左の方へ少し……」

と言つて、腰を屈めた。

マアシヤルは、あいにく顏を一つしか持ち合はさなかつたので、せうことなしに、先づ一人の寫眞師の方へ向き、それから次の方を向いてやつた。

「有難う。」

寫眞師は挨拶をして、すぐに右と左とに別れようとした。

「ちよつと待ち給へ。」副統領は呼びとめた。「君達の用事は濟んだかも知れないが、私の方に少し言分が殘つてゐるから。」

寫眞師はちらと變な眼つきを交はしながら立ちどまつた。

「君達は、むかしむかし斜視の男が、牛を殺さうとした話を聞かなかつたかい。」副統領は哲學者のやうに靜かな皮肉な口振りで話し出した。「斜視の男は自分の助手に言つたさうだ。おい、俺は牛の眉間を叩しつけようと思つてるのだから、巧く牛を持つてゐて呉れなくつちや困るつて。」

「へえ……」二人の寫眞師は小首を傾げた。

副統領は言葉を繼いだ。

「『旦那。お前さんが睨んでる方へ牛の頭を持つてくんですかい。』と助手が訊くと、斜視の男は『さうだよ。解つてらあね。』と呶鳴りつけた。すると助手は『ぢや勝手にするがいいや。お前さんの眼は兩方を睨んでるが、牛には頭は一つしきや無いんだからね。』」

親父の着物

亞米利加の大富豪ロツクフエラアがまだ盛年の頃、何處へ出掛けるにも、見窄らしい服を着て平氣でゐるので、仲のいい友達がひどく氣に病んだものだ。

友達はいづれもおめかしや揃ひと來てゐるので、ある日の事辛抱がしきれないで、ロツクフエラアに注意をした。

「いつか中から、一度言はうと思つてゐたんだが、君の身裝は餘りぢやないかね。」

ロツクフエラアは暢に落ちなささうに、

「どういふ意味なんだね。僕の身裝があんまりだと言ふのは。」

友達は情なささうな顏をした。ロツクフエラアが生れて一度も新約全書を讀まなかつたと白狀したところで、まさかそんな表情はすまいと思はれる程の顏だつた。

「どういふんだか、ちよつと見たら判りさうなものぢやないか。僕達と比べてみたまへ、君の身裝は隨分見窄らしいぢやないか。」

ロツクフエラアはやつと氣がついたやうに、友達の身裝と自分のとを比べて見た。

「別に見窄らしくはないぢやないか、唯君達のが綺麗過ぎるんだよ。」

「だつて……」と友達はじれつたさうに言つた。「君は吾々の仲間で一ばん富豪なんぢやないか。」

「さうかも知れんな。」富豪は相變らず平氣な顏をして言つた。「それにしたつて、僕は別に見窄らしくは思はんが……」

「見窄らしいよ。なんと言つたつて見窄らしいよ。」友達は暴になつて喚いた。「第一君のお父さんの事を考へて見給へ。お父さんは何處へ出るにもちやんとした身裝をしてゐたよ。」

「さうだつたかなあ。」ロツクフエラアは笑ひ出した。「だが、君、今僕の着込んでるのは、その親父の服なんだよ。」

辯護士

米國の大統領リンカンがまだ田舍辯護士で齷齪してゐた頃、ある時訴訟用で小さな田舍町へ旅立ちしなければならぬ事になつた。

ついでだから言つておくが、リンカンが田舍辯護士をしてゐたのが事實だからといつて、田舍辯護士が大統領になると限つたものではない。辯護士といふものは、いつも自分勝手な理窟をつけたがるものだから、この點だけは特に言つて置かなければならぬ。

その晩、リンカンが泊る筈になつてゐる旅籠屋は、停車場から十四哩ほど引込んだところにあつた。リンカンはがた馬車に乘つて旅籠屋に出掛けて行つた。途中で雨が降り出した。辯護士は路傍のごろた石と一緒に、頭からびしよ濡れになつた。

宿に着いたリンカンは、附近(あたり)を見廻して不機嫌な顏をした。部屋は馬小舍のやうに薄穢か

つた。その上煖爐には小さな火しか燃えてゐなかつた。火の周圍(まはり)には田舍の旅の者と仲間の辯護士が四五人、かじかんだ手を出してがたがた顫へてゐた。どの手もがまだ運を摑んだ事がないらしかつた。

皆は木片(こつぱ)のやうに默つて衝立つてゐたが、暫くすると仲間の一人がリンカンに言つた。

「ひどく凍(し)みるぢやありませんか。」

「さうですね。」とリンカンは返事をした。「地獄の熱さも堪らないが、ここの寒さもまた格別ですね。」

「へえ、地獄の熱さですつて。貴方は地獄においでになつた事があるんですか。」

田舍客が口を出した。

「居ましたよ。」

リンカンは眞面目くさつて言つた。居合はせた辯護士は顏を見合はせて笑つた。

何れも腹の減つたやうな笑ひ方だつた。

田舍客は險しい顏をして訊いた。

「それぢや伺ひますが、地獄つて一體どんな處です。」

「ちやうどここのやうでね。」未來の大統領はぼやくやうに言つた。「法律家はみんな火の周圍に立たせられてゐましたよ。」

流石にリンカンだ。辯護士をしながらも、すべて法律家の靈魂は燒栗のやうに地獄の火で黑焦にされるものだと知つてゐたのだ。單にこの點だけでも彼には大統領の値打があつた。

吳々も言つておくが、その晩煖爐の周圍に立つてゐた辯護士は五六人あつた。そして唯一人リンカンだけが、靈魂を燒栗のやうに黑焦にしないで濟んだ。

黑人の盜み

イネズ・ミルホオランド・ボアスヴン女史といふと、米國でも女權論者のちやきちやき、おまけに數へる程しかない女流辯護士の一人として、相應名を賣つてゐる婦人だ。

この女辯護士と同じ建物のなかで隣合せに住んでゐる男が、ある時洋服を一着盜まれた。色々詮議の末が、門番の黑人に嫌疑がかかつて、黑人は自分の部屋で朝食を食つてゐる所を押へられた。（忘れても用心しなければならないのは、急用をもつ訪問客は大抵朝早く來るといふ事だ。）

黑人は女辯護士に手紙を出して、熱心に自分の辯護を賴んだ。黑人を法廷で辯護するのは黑人を天國へ引張り上げるよりか、ずつと愉快な事に相違ない。なぜといつて、天國へ引上げられた黑人は、そのまま二度と姿は見せないが、牢屋から出て來る黑人は、また同じ辯護士の事務室に顏出しするにきまつてゐるから。

女辯護士はその辯護を引請けて、法廷に立つた。そして色々の方面から熱心に喋つた効があつて、黑人は都合よく無罪になつた。

黑人はその翌朝早く女辯護士の事務室に入つて來た。

「先生、昨日は色々どうも有難うございました。」彼は白い齒を見せて追從笑ひをした。「實際あの服は私がちよろまかしたのに相違ありやせんが、先生の辯護を聞いてると、どうやら

私が盗んだつてえのは怪しくなつて來やした。ことによつたら、私の仕事ぢやなかつたかも知れやせんぜ。」

歐陽詢と石碑

むかし、唐の歐陽詢が馬に乘つて、ある古驛を通りかかると、崩れかかつた路ばたに、苔のへばりついた舊い石碑が立つてゐた。碑の文字は瞥見にも棄て難い味はひがあつた。

丁度そこへ百姓が一人通りかかつた。手には引いたばかしの大根を提げてゐた。歐陽詢は呼びとめて訊いてみた。

「この碑は誰の書だか、お前知つてはゐなからうな。」

「知らねえと思ふ人間に、なぜ聞かつしやるだ。」百姓は艴とした顏をあげた。「これはあ、索靖といふ偉え方の書だつぺ。」

「ふむ、索靖か。」

歐陽詢は馬を駐めたまま、じつと石碑の文字に見惚れてゐた。馬は仕合せと文字の鑑定が出來なかつたので、その間にせつせと路ばたの草を食べてゐた。

暫くすると、歐陽詢は氣がついたやうに馬をせき立てた。馬は食べさしの草を咥へたままぽかぽかと歩き出した。やつと小半町も來たかと思ふと、歐陽詢はだしぬけに手綱を引張つて、馬を後へ返さうとした。馬はむら氣な主人の仕打を笑ふやうに澁くりながら、また後返りをした。

歐陽詢は馬から飛び下りて、石碑の前に立つた。

「巧いな。」

彼は小首を傾げたまま、いつまでもいつまでも文字に見惚れてゐたが、たうとう立ち草臥れたと見えて、馬の背から敷物を取下して、その上に坐つた。

そしてその晩も、翌晩も、また翌々晩も、石碑の下に野宿をして、じつとその文字に惚々としてゐるので、馬はすつかり腹を立てて、その邊の草つ原にごろりと横になつた。横にな

つたからといつて、馬は猫や大學教授のやうに哲學などは少しも考へなかつた。
歐陽詢が馬を起して、やつと石碑の下を去つたのは、丁度四日目の朝だつたさうだ。

蛇

戸田采女正一西といふと徳川秀忠について眞田昌幸を信州上田の城に攻めた智慧者だが、この智慧者の家來に、人並外れて蛇を恐がる男があつた。
ある夏の夕方、仲よしの朋輩の一人が、荒縄の水に漬つたのを、
「そら蛇だ。」
と、この男の足もとに投げ出したことがあつた。男は、
「呀！」
と言つて、棒きれのやうにばつたりと地面に倒れたが、そのまま顔を眞青にして氣絶してしまつた。

居合はした人達は、慌てて醫者を呼びに走つた。急場の間に合ふのは、大抵藪醫者ときまつてゐるが、亡くなつた後での名醫よりは、息があるうちの藪醫者の方が有難かつた。その藪醫者は氣つけ藥と血の道の藥とをごつちやにして、相手の口に含ませたらしかつたが、女に利く藥は男にもいいと見えて、氣絶した男はやつと息を吹き返した。
息を吹き返すと、その男は直ぐに刀の柄に手をかけて、先刻惡戯をした男に詰め寄つた。
「人中でこんな耻をかかされちや、默つてゐられない。さあ、果合ひをしよう。」
「いや、惡かつた。重々あやまる。ほんの惡戯だつたんだから宥して呉れ。」相手の男は先刻の縄を取上げて見せた。「見給へ。投げ出したのは蛇ぢやなくて、縄だつたんだよ。」
縄だつたと氣がつくと、男は一層聲を荒くした。とてもこの儘では納まるまいと思つた惡戯男は、すつくと立ち上つた。
「それぢや仕方がない。如何にも果合ひをしよう。だが、他人の迷惑になつてもなんだから明日の夕方人通りのない原つぱで行る事にしよう。」

翌晩になると、例の男はかひがひしい白裝束で長い刀を引つこ抜いて待つてゐた。惡戯男は瓜のやうに素つ裸になつてやつて來た。

「乃公の得物はこれだ。」

彼はかう言つて、長い竹竿に五尺ばかりの青大將のによろによろしたのを結びつけて、相手の鼻先で振つて見せた。

蛇嫌ひの男は、それを見ると刀を其處へ投げ捨てたまま、犬のやうに走つて、自分の邸に逃げ込んでしまつた。

喧嘩は凡てかうするものである。

小說家の面會

佛蘭西の小說家エミイル・ゾラは、新聞記者との會談をひどく怖がつてゐた。例のドレエ

フス事件の折などは、自分も進んでその關係者の一人となつただけに、新聞記者につかまつて大袈裟に疊み掛けた質問にでも出會しはしなからうかと、びくびくものでゐた。

ところが、その事件の最中に、ある新聞記者は是非ゾラに面會しなければならぬ用事が出來た。だしぬけに名刺を突きつけたところで、時節柄この文豪が直ぐにお目に懸らうとも言ふまいし、記者はほとほと當惑した。

記者は困つた折にいつもするやうに、煙草を喫さうと思つて、上衣のポケットに手を入れた。指先に觸れたのは、煙草ではなくて、やはりその頃の文士の一人フランソア・コッペエの詩集であつた。

記者は先刻友達に出合つた時、コッペエの詩集を讀みさしのまま、ポケットに入れた事を思ひ出した。そしてそれと同時に、コッペエが風邪か何かで臥せつてゐるのを思ひ出すと、覺えず小躍りして叫んだ。

「さうだ。お氣の毒だが、コッペエさんの御厄介にならう。」

記者はその足で直ぐにゾラを訪ねた。そして受付の男を見ると急に悲しさうな顏をして、

「フランソア・コッペエさんが亡くなりました。御主人がまだ御存じでなければちよつと知らせて上げて下さい。」

と、出鱈目な事を言つた。

間もなく、ゾラは右手にペンを持つたまま、あたふたと飛び出して來た。

「なに。コッペエが亡くなつたつて。まあ、君。此方へ通つて詳しく話してくれたまへ。」

應接室へ通されると、年若な記者はいきなり頭が卓子に打突かる程大きなお辭儀をした。

「まことに申譯がございません。コッペエさんはお風邪のやうには聞きましたが、お生命に別條はございません。唯さうでも申さなければ、先生がなかなかお會ひ下さるまいと思つたものですから……」

ゾラはそれを聽くと、鐵瓶のやうに湯氣を立てて怒り出した。何しろあの通りの駄文家の事だから、例の長文句で立て續けに口穢く罵つたに相違ないが、ひとしきり嵐が過ぎてしまふと、それでも一々記者の質問に答へて、自分の意見を吐かずにはおかなかつた。

痘面の笑顔

今は孝行者が多い世の中だから、孝經など讀まなくなつたが、むかしはなんぞといつてはこの經書を繙いたものだ。ある時備前少將光政が、池田出羽、池田伊賀などといふ家老達と一緒になつて、この書物を讀んだ事があつた。

爭臣の章まで來ると、光政は眼をあげて皆の顏を見くらべた。

「さ、ここぢやて。お前達にとつて忘れてはならないのは。もしか乃公に善からぬ事があつたら遠慮なく諫めて呉れ。そしてお前達も人の諫めに會つたら、吃度その言葉を請け容れるやうにしなくつちやならんぞ。」

皆は一度に頭を下げて恐れ入つた。——頭といふものは重寶なもので、どんな間違ひをしてゐても、叮嚀に辭儀をさへすると、大抵の人は、

「乃公のいふ事が、よく頭に入つたと見えるて。」

と、すぐに氣色をなほして容してくれようといふものだ。この場合頭が少しくらゐ禿げてゐようと、尖つてゐようと何の差支はない。そしてそれから五分間と經たないうちに、今の事情をすつかり忘れてしまふのも、やはりこの頭である。

一度に下げた頭のなかに、唯一つ下げやうの足りない頭があつた。その持主は中川權左衞門といふ男だつた。權左衞門は一膝前へ乘り出して來た。

「寔に結構なお言葉で、お家萬歳の兆と有難く存ずる次第でござりますが……」彼はちよつと眼をあげて殿の顏を見た。「正直に申上げまする、殿のお顏は痘瘡(あばた)の痕が見苦しく目立つていらつしやる上に、お眼の中が鋭いので、御機嫌の悪い時は二目と拜まれないやうに存じまする。で、眞實に諫言をお好みになりますなら、何よりも先にお顏を和やかに遊ばされますやうに……」

備前少將はそれを聞くと、夏蜜柑のやうな痘面を赤くしてゐたが、暫くすると、

「成程な。よく言つて呉れた。禮を言ふぞ。」

と輕く頷いて見せた。それからといふもの、少將は家來の前では、痘面を捩ぢ曲げるやうにしてにこにこしてゐた。——殿樣にしては、感心な心掛であつた。

怖い物

どんな人にでも好き嫌ひといふものはあるものだ。むかし有馬兵庫頭といふ人があつた。この人は一代のうちに色々な仕事もしたらしいが、その仕事よりも蟹を恐がつたといふ事で今だに名を殘してゐる。野路で偶々赤い爪をふり上げた蟹に出會すと、兵庫頭はぶるぶる顫へて、いきなり馬を引返して逃げ出したものださうだ。もしか身持の悪い蟹が、金を貸せとでも言ひ出さうものなら、兵庫頭は馬の鞍から知行も何も振り捨てて駈け出して行つたかも知れなかつた。

大久保伊勢守といふ人は、ひどく蜘蛛を怖れた。屋敷の植込をぶらついてゐる時、青白い

梔子の花陰に女郎蜘蛛が居睡りをしてゐるのを見つけでもすると、眞青になつて拔足で逃げ出したものだ。

蛙は愛嬌者で、臍をもつてゐない癖に、人間並にその一つを持合せてゐるらしい顏つきをしてゐるが、廣い世間にはこんな愛嬌者を何よりも恐がる人さへある。

それは栗原主殿頭といつた男で、この男は女房を持つてゐたが、その女房よりも、地震よりも、蛙の方が怖しかつた。ある時、供の奴を一人連れて野路を歩いてゐると、だしぬけに蝦蟇（がま）に出合つた。蝦蟇はさつきまで物陰で大學教授のやうに哲學を考へてゐたらしいが、滅法腹が空いたので、のつそりと明るみへ這ひ出して來たところだつた。

主殿頭はそれを見ると、一度に二間ほど後に飛びしざつた。そして刀に手をかけてきつとなつた。刀は備前の正眞物だつた。

「憎つくき蝦蟇め。おのれはまだ主殿頭を知らないと見えるな。」

彼は思ひきり大きな聲で呶鳴りつけた。

實際蝦蟇はまだ主殿頭を知らなかつた。で、目をあけて念入りに相手の顏を見たが、別に

秀れて高い鼻を持つてゐるわけでもなかつた。

「おのれ、早く退りをらんか。」

主殿頭はぶるぶる顫ひながら、刀をひつこ拔いてみせた。

だが、蝦蟇の方では別に後しざりをする必要もなかつたので、二足、三足のそのそと前に這ひ出して來た。主殿頭はそれを見ると、

「いや、膽の太い奴めが。そちには怖いといふ事が判らんと見えるな。」

そのまま刀を擔げて、一散に逃げ出したさうだ。

惡物食ひ

「犬を食つた。」——

といふと、感心な婦人會の會員達は、

「かはいさうに生活が苦しいんだわ。」

と、すぐ有合せの麵麭屑と、讀みさしの婦人雜誌とを贈つてよこさうとするかも知れないが犬を食つたのは、何も肉が高くなつたからではなかつた。

それは犬の肉が大層好きだつたからで、この惡物食ひは、德川の末頃江戸に住んでゐた男だつたが、一日犬を食はなければ氣分が惡くなるので、そんな折には豫て剝いで置いた犬の皮を少しづつ煮て食べてゐたさうだ。

それと同じ頃に、江戸に大久保八右衞門といふ武士がゐた。この男の下郎にひどく煙草の脂が好きなのがあつて、閑さへあると、いろんな人から脂を買ひ集めて、それを椀に盛つてうまさうに食べてゐた。

それとよく似てゐるのは、松平大進といふ武士のやり方で、酒宴になると、きまつて長羅宇ですぱりすぱりと煙草をふかし出す。そして煙草が半分ばかし燻つた頃を見計らつて、盃のなかにその吸殼を叩き込んで、ぐつと一息に煽飲りつけたものだ。

灰屋紹益が愛人吉野太夫の亡くなつた時、火葬にした灰を土に埋めるに忍びないからといつて、酒に浸してそつくり嚥み下してしまつたのは名高い話だ。

それと同じなのは、幕末頃に生きてゐた何とか三郎といふ男で、惡物食ひで評判を取つた程あつて、女房の叔母が亡くなると、火葬にして、その灰をアスピリンか何ぞのやうにすつかり嚥み下してしまつた。

それを見た女房は、木の葉のやうに眞青になつて顫へ出した。

「まあ、なんといふ怖しい人だらうね、お前さんは。現在女房の叔母の骨を食べてしまふなんて。まるで鬼ぢやないか。もうもうこんな家には一刻の間もじつとしてはゐられない。」

彼女は直ぐに表へ飛び出さうとした。三郎はその袂を押へて笑つた。

「そんなに怒るもんぢやないよ。お前がそんなに言ふんだつたら、これからお前の亡くなるまでは、もう人の骨など食べやしないから。」

三郎め。女房が亡くなつたら、またその骨を食べてしまはうと思つてゐたのだ。

皮肉

英國のウインゾル王宮の皇室圖書館に、毎月の雜誌が取揃へてある雜誌棚がある。その棚の上に現代の名高い人達の寫眞帖が幾冊か載せられてゐる。寫眞帖はその人達の職業によつてそれぞれ別冊になつてゐる。

今の英國皇太子がまだ幼かつた頃、ある日その雜誌棚の前に立つて、多くの寫眞帖のなかから、「各國民元首帖」といふのを引張り出してじつと見てゐた。

それには胸一杯ぴかぴかする勳章を下げてゐる人が多かつた。なかに唯一人質素なフロックコオトを着て、苦り切つた顏をしてゐる男があつた。皇太子はそれを見ると後を振りかへつた。そこには父のジョオジ皇帝が立つてゐた。

「お父樣。これ誰なの。」

「それは米國の大統領ルウズヴェルト氏だ。」

皇太子は可愛らしい指先で、ルウズヴェルトの鼻の上を押へた。氣難しやの大統領は嘘をしさうな顏になつた。

「お父樣。この人利巧者、それともお馬鹿さん。」

「さうだな。」ジョオジ皇帝はにこにこ笑つて、「ルウズヴェルト氏はなかなか偉い方だよ。まあ、天才とでも言ふのだらうて。」

それから四五日經つて、ジョオジ皇帝が何か見たいものがあつて、その「各國民元首帖」をあけて見ると、ルウズヴェルトの寫眞だけが取外されて見えなかつた。

「をかしいな。」

何氣なく側にあつた「現代人物帖」を取上げてみると、その第一頁目に失くなつた筈のルウズヴェルトの寫眞が挿まれてあつた。

皇帝は皇太子を召した。

「この寫眞を移したのはあんたかい。」

「私よ。」

「何が理由があつたのかい。」

「だつて、お父様。あなたこなひだお話しになつたぢやないの。」皇太子は得意さうに言つた。「ルウズヴェルトさんは天才だつて。だから私元首帖から引つこ抜いて、人物帖の方へ入れたの。それが悪くつて。悪かつたら御免なさいよ。」

青磁の皿

むかし、鴻池家に名代の青磁の皿が一枚あつた。同家ではこれを廣い世間にたつた一つしか無い寶物として、土藏にしまひ込んで置いた。そして時たま主人ひとりがそれを取出して目を悦ばせることにしてゐた。すべて富豪といふものは、自分の家に轉がつてゐる塵つ葉一つでも、他家には無いものだと思ふと、それで滿足することができるものなのだ。

ある時鴻池の主人が、數寄者の友達二三人と一緒に、生玉へ花見に出掛けて行つたことがあつた。一獻くまうといふ事になつて、皆はとある料理屋に入つた。

亭主は豫々贔員になつてゐる鴻池の主人だといふので、料理から器まで凝つたものばかしを竝べ立てた。そのなかに、例の鴻池家祕藏のものと同じ青磁の皿に、肴が盛られたのがあつた。

鴻池の主人は、皿を掌に載せたまま、じつと考へてゐたが、暫くすると亭主を呼んで、この皿を讓つてはくれまいかと、疊の上に小判を三十枚竝べた。亭主は吸ひつけられたやうに小判の顏を見て深い吐息をついてゐたが、忘れものでもしてゐたやうに慌てて承知の旨を答へた。

鴻池の主人は、掌の皿をいきなり庭石に敲きつけた。青磁の皿は小判のやうな音を立てて粉々に碎け散つた。

主人は飲みさしの盃を取上げながら言つた。

「あの皿は家の品とそつくり同じや。同じ青磁の皿が世間に二つあるやうでは、家の顏に關

はるよつてな。」

そして睫一つ動かさうとしなかつた。

獨帝の癖

獨帝には妙な癖がある。それは何か困つた事に出會すと、すぐと自分の耳朶を引張らずにはゐられないといふ事だ。

大分以前の話だが、獨帝には從祖母(おばをば)さんに當る英國のヴクトリア女皇が崩くなつて、葬儀の日取りが電報で獨帝の手許に報ぜられて來た事があつた。その折獨帝は六歳になる甥を相手に、何か罪のない無駄話に耽つてゐた。

獨帝は侍從の手から電報を受取つたが、なかに何か氣に入らぬ文句でも書いてあつたものか、(獨帝は英吉利と英吉利人とが大嫌ひであつた。)すぐにいつもの癖を出して、自分の耳

朶をいやといふほど引張つた。

それを見て甥は言つた。

「伯父ちやん。なんだつて、そんなに耳を引張るの。」

「うむ。ちよつと困つた事が出來たでの。」

「困ると、伯父ちやんはいつも耳引張るの。」甥は不思議さうに訊いた。

「さうぢや。」

「そんなら、もつともつと困る事があつたら、伯父ちやんどうするの。」

「その時はな。」獨帝は電報を卓子の上に投げ出し、その手でいきなり甥の耳を撮んだ。「その時はかうして他人の耳を引張つてやるのぢや。」

猶太人と狗

マリイ・アンチンといふ猶太種の女は、火のやうな激しい性格で、今アメリカの各地で頻りと演說をして歩いてゐる。その演說といふのは、猶太人が傳說的に持ち傳へてゐる神樣のお約束の理想鄕は、ほかでもない亞米利加の事だといふのだ。

成程聽いてみると尤もな話で、亞米利加には猶太人の好きな金は有り餘る程あるし、口喧しい神樣はゐないし、おまけに男はみんな女に親切だといふから、猶太種の女が理想鄕とするに打つてつけの土地柄だ。そして今一ついい事には、亞米利加人といふ奴は、こんなお世辭をいふときまつたやうににこにこして、

「マリイ・アンチンはよく物の解つた女で、おまけに素敵な美人だ。」

と、ぢきに相手を美人にしてくれようといふものだ。

この女が、最近土耳其から歸つたばかしの男の友達と何處かで會つた。男は色々の面白い旅行話を聞かせた後、指の節をぽきぽき鳴らしながら、

「さうだ。忘れてゐたが、土耳其に面白い二つの習慣があるんですよ。」

と、妙に調子をはずませて話し出した。

「それはね、猶太人と狗ころだと見ると、ふんづかまへて叩き殺してもいいんですとさ。」

マリイ・アンチンの圓い顏は銀貨のやうに眞靑になつた。

「まあ、仕合せだつたわね。あなたや私がそんな國に住んでゐなかつたのはね。」

男の友達は眼を圓くして吃驚した。自分は猶太種ではない。してみると、相手は自分を狗ころと間違へてゐるのだと思つて……

馬の上から

男爵石黑忠悳氏の話によると、自分を偉くしたのは半分以上川路左衞門尉聖謨の力ださうだ。川路左衞門尉といへば、仙石騷動を裁いた名代の傑物だつた。石黑氏の父親は子供を偉くするためには、何か素敵な物を見せなければならないといふので、そこで川路左衞門尉の前へ連れて行く事にきめた。

石黒氏の父親は、いつだつたかわざと相手の目に立つやうにと、變り色の羽織を着て左衞門尉に會ひに行つた事があつた。その折左衞門尉が、自分は毎朝馬で馬場先を運動するのを樂しみにしてゐる事を話したので、石黒氏は父親につれられて、朝夙くから馬場先へ出掛けて行つた。

左衞門尉は馬に乘つてやつて來た。石黒氏は父に催促せられて、慌てて頭を下げてゐた。左衞門尉は自分の前に茸(きのこ)のやうに蹞(つくば)つてゐるこの二人に目をつけた。

「や、お前いつぞややつて來た石黒ぢやの。」

左衞門尉は馬の上から聲をかけた。馬は立ちどまつて叱りつけるやうな目つきで二人を見おろした。

「はい、石黒でござります。御健勝の御容子を拜して何よりも……」

石黒氏の父親は、かう言つて茸のやうな悴の頭をまた押へつけた。

「其處にゐるのは、お前の悴かい。」

左衞門尉がさう言ふと、馬もその積りで高慢臭い顏をして茸のやうな悴の頭を見た。

「はい手前の悴でござります。何卒お見知り置き下されまして……」

石黒氏は父親に催促せられて、今まで下げづめだつた頭を擡げた。見ると、馬の上で左衞門尉の二つの眼が蠟燭のやうに光つてゐた。

「いい子だの。勉强して偉い者になれ。忘れるんではないぞ。」

左衞門尉はかう言ひ捨てて、馬に一鞭あてた。馬は自分で偉い者の手本を見せるやうに、後脚で砂を蹴つて飛んだ。

「勉强して偉い者になれ。忘れるんではないぞ。」——石黒氏の說によると、この一言を忘れないでゐたから、今の身分になつたのださうだ。實際結構な言葉だが、かういふ言葉は、やはり馬の上から茸のやうな子供に聞かせる方が、一番ききめがあるやうだ。

演說の用意

長い文章なら、どんな下手でも書く事が出來る、文章を短く切り詰める事が出來るやうになつたら、その人はいつぱしの書き手である。これは演說にもまたよく當て嵌る。

ウイルソン大統領といへば、米國でも聞えた雄辯家であるが、先日の事、仲の善い或る友達が大統領に向つて、

「あなたは名代の演說上手でいらつしやるが、一つの演說を用意なさるのに、どのくらゐの時間が要りますか。」

と訊いたものだ。何事によらず、素人といふものは、出來上る時間を訊きたがるもので、もしか畫家に向つて、何よりも先に、

「この畫をお仕上げになるのに、幾日程お掛りでしたか。」

と、訊く人があつたなら、その人は道にかけては先づ素人だと見て差支ない。ウイルソンの友達も、いづれはさうした輩だつたに相違ない。

ウイルソンは答へた。

「どのくらゐの時間といつて、それは演說の長さによる事ですからね。」

「いや御尤もの事で。」質問者はそれだけで、何もかも呑み込めたらしい悧巧さうな顏をした。「してみますと、議會での大演說などは、お支度に中々お手間が取れる事でせうな。」

「いや、さういふ意味ぢやない。」大統領は上品に口をつぼめて笑つた。「一番手間を取るのは所謂五分間演說といふ奴で、あれを用意するには、正直なところ二週間はかかりますよ。」

「ほう、そんなもので。」

質問者はなんだか腑に落ちなささうな返事をした。

「それから、三十分くらゐの演說だつたら、先づ用意に一週間といふところです。もしか喋れるだけ喋つてもいいといふのだつたら、それには準備など少しも要りません。今すぐにと言つて、すぐにも喋れますよ。」

素人よ。もしか感心する必要があつたら、演說でも、文章でも、成るべく短いのを選んだ方が無難だ。早い話が、女房の諷刺(あてこすり)にしても、手短な奴にはちよいちよい飛び上るほど痛いのがある。

靄山の娘

貫名海屋の系統を傳へた谷口靄山が、まだ京都の下長者町に居た頃、南畫好きの或る男がわざわざ大阪から訪ねて行つて弟子入りをした。

靄山は娘と二人で其處に住んでゐたが、その日は娘に留守番でも言ひつかつたものと見えて、皺くちやな口で、

「今日は誰も居ぬでの……」

と斷つて、薄茶一服點てようともしなかつた。その代りに薄茶よりもまだ水つぽい南畫の講釋をくどくどと言つて聞かせた。

南畫を習はない先に、南畫はとても習へないものだと知つたその男は、折を見て歸らうとすると、靄山は押へるやうな手つきをして引留めた。

「ちよつとお待ちな。今娘が歸つて來たさかい、お引合せしませう。」

その男は畫も好きだつたが、それ以上に女が好きであつた。畫にはまだ解らない點もたんとあつたが、女の事だけは何もかも知り拔いた積りでゐた。それだけに娘に引合せると聞いては歸る譯にもいかなかつた。で、居ずまひを直したり、ちよつと襟に手をやつたりした。

間もなく隔ての襖が明いて、お茶が運び出された。

「これが俺の娘や。不束者での……」

といふ靄山の言葉に、初めて氣がついたやうに、その男は叮嚀にお辭儀をした。そして顏を上げて相手を見ると吃驚した。

娘といふのは、小皺の寄つたお婆さんだつた。

よくよく考へてみると、不思議でもなかつた。その頃靄山はもう七十の上を越してゐたらしかつたから、五十近い娘があつたところで、別段腹を立てる程の事でもなかつた。

その男はお茶も碌に飲まないで、そこそこに挨拶して歸つた。そして二度と靄山の門を潛らうとはしなかつた。

靜かな死

茶人橘廣樹の死際こそ、この上もなく靜かなものだつた。その日は大阪にゐる友達から、名高いお城の黄金水を送つて來たから、それで茶を煮るのだといつて、仲よしの田能村竹田などを招いて、氣輕さうに立働いてゐた。

火を吹きおこしたり、水瓶を洗つたりしてゐるうち、廣樹は急に氣分が悪くなつたといつて横になつた。竹田は今更茶でもないので、枕頭に坐つて看病してゐると、曉方に廣樹は重さうな頭を持上げて、竹田を見た。

「いろいろ有難う。だが、今度は迚も助かるまい。もう茶を點てる間もなささうだから、あの黄金水を飲んでお別れがしたいものだな。」

竹田は水瓶を引寄せて一口飲んで廣樹にさした。病人は鶴が水を飲むやうな口つきをして

うまさうに一口飲みほした。そして今一度といつて竹田にさした。竹田はまた飲んだ。

廣樹は枕に顏をもたせて、「今歌が一つ出來たから、どうか書き留めてくれ給へ。」といふので、竹田は筆を執つた。

ちよろづとこそ
むすぶべき黄金水
汲みかはすれど
水泡とぞ消ゆ

廣樹は懶さうに頭を擡げて、その拙い歌を見てゐたが、獨言のやうに、

「おや、水の字が差合ひになつてゐる。死ぬまでの氣紛れに一つ考へ直してみようか。」

と言つてゐたが、暫くすると、

「さうだ、『泡と消えゆく』でよかつたんだ。」

と呟いたかと思ふと、そのまま息が絶えてしまつたさうだ。

靜かな死際だ。唯一つ欲をいふと、歌だけが餘計だつた。日本人は地味で、生一本で、別

に言分はないが、唯一つ辭世を詠みたがるのだけは贅澤すぎる。死際におしやべりは要らぬ事だ。狼のやうに默つて死にたい。

頤の外れたのを治す法

俳人K氏のお父さんは、醫者であつた。醫者であることすら大變なのに、おまけに藪醫者であつた。藪醫者といふと、蝸牛や蟷螂と同じやうに、草ぶかい片田舎にばかり住んでゐるやうに思ふ人があるかも知れないが、實際は都にも多いやうだ。とりわけ博士などと肩書のついた輩に、そんなのが少くないやうだ。唯幸福なことには、肩書がつくと、病人がそれを信用してかかるから、癒らない筈の病氣までついひよつくり快くなつたりすることがあるので、病人は勿論、お醫者自身までが、それを自分の診察がいいからなのだと穿き違へて、本當は藪醫者であるのに氣がつかないまでのことである。だが、K氏のお父さんは博士でもな

かつたから、都へも出ないでおとなしく田舎に住んでゐた。

流行らない醫者にとつては田舎も住みよくはなかつた。老人は毎日日向ぼつこをして、もつと病人の多い國はないものかなどと考へてゐた。さう思つて見ると、その邊の人は男も女もみんな馬のやうに達者だつた。

ある日めづらしく一人の病人がやつて來た。「來たな」と醫者はあわてて玄關へ飛び出してみた。そこに立つてゐるのは、間のぬけた顏をした男で、涎を流しながら何かたわいもないことを言つてゐた。よく聞いてみると、頤がはづれて困つてゐるといふのだつた。なんでも一人二人醫者にかかつてはみたが、どうも治りきらないらしかつた。

「おれの運が向いて來たのだ。」

と、醫者は肚の中でつぶやいた。そしてこの病人を治すと、外では治らなかつただけに、自分の名醫であることがぱつと世間に擴がつて、これからはとても受けきれないやうな大勢の病人が押寄せて來るに相違ない。それには宅の玄關は餘り狹すぎるから、なんでも近いうちに大工を呼んで建替への見積りをとらなくちやならぬと、そんなことまでも考へた。

だが、ほんたうの事をいふと、醫者はどうして頤のはづれたのを治したものか、まるで見當がつかなかつた。で、こつそり次の室に入つて讀み古した醫術の本を大急ぎで繰つてみたが、その本にはお産のことばかり詳しく載つてゐて、頤のことなどは唯の一行も書いてなかつた。

「困つたな、何かいい分別はないものかしら。」

醫者は手を拱いて考へた。アンチ・ヘブリンを服まさうかとも思つたが、それにしては熱が少しもなかつた。下劑をかけようかとも思つたが、それにしては腹に少しの滯りもなかつた。

「この病人一人でおれの運がきまらうといふのだ。」

醫者はまた繰返して肚の中でかう思つた。すると、その一刹那すてきないい考へが電光のやうに頭の中を走つた。

「さうだ。いい思ひつきだ。きつと治るに相違ない。いよいよおれの運が向いて來たといふものだ。」

醫者は嬉しさうににやにや笑つた。そして病人に手拭できつく頬冠りをさせて裏口まで連

れ出した。背戸には小流が可笑しさに堪らぬやうに笑ひ聲をたてて走つてゐた。醫者は病人をその縁に立たせた。

「一息にこの溝を飛ぶんだぞ。するとその拍子に頤がはまるからな。」

病人は醫者と小流とを見比べて變な顏をしたが、別になんとも言はなかつた。そしてばつたのやうに足を揃へてひよいと一息に溝を飛んだ。

醫者は急いで頬冠りをとらせてみたが、病人は相變らず間の抜けた顏をして、涎をくつてゐた。

病人はまた頬冠りをさせられた。今度は一段と強く縛られたので、顏は小包のやうに歪んでゐた。醫者はそれを連れて裏の柿の木の下に立たせた。そして澁柿の實が貧血症のやうに青い顏をしてゐるのを見上げながら言つた。

「あすこから飛び下りるんだぞ。するとその拍子にうまく頤がはまるからな。」

病人は歪んだ顏をして悲しさうに目を瞬いたが、それでも素直に枝に手をかけて柿の木に登つて行つた。そして呻くやうな聲をしたと思ふと、もうそこから飛び下りて蛙のやうに地

面に兩手をついてゐた。

醫者は急いで頰冠りをとつて、病人の顏を覗き込んだ。

病人は相變らず涎をたらしてゐたが、顏を火のやうにして何か譯の分らぬことを呶鳴つてゐた。

それからといふものは、醫者の評判は一そう悪くなつた。氣の毒な老人は、こそこそ家を疊んでまた他の村へ引越したさうだ。

老畫家の音曲

洋畫家淺井忠氏の追善が、ある年東京の根岸で開かれたことがあつた。その折鈴木鼓村氏が箏を彈いた。この風變りな箏曲家がそろそろ爪調べにかかると、そこに居合はせた多くの人達の中から、誰だかだしぬけに手を拍いたものがあつた。皆はその方を振向いて見た。そ

こにはNといふ老つた洋畫家が六朝の文字のやうに鯱子張つて控へてゐた。N氏は皆の眼が一齊に自分の方に注がれると、いくらか氣恥づかしかつたかして、傍にゐる老年の洋畫家小山正太郎氏の方へ顏を捩ぢ向けて言つた。

「小山さん、鈴木君の箏は豫て噂に聞いてゐましたが、實際うまいものですな。」

小山氏も餘り音曲の方は確かでなかつたらしく、あやふやに頭を動かしたままでなんとも答へなかつた。

すると、その直ぐ後にIといふお伽話の作家が控へてゐたが、二人の話を聞くとくすくす笑ひ出した。そして後からN氏の肩を叩いた。N氏は四角な顏を後へ振向けた。

「どうしたんだい。」

「どうもしやしないが、君が餘り面白い事を言ふからさ。」N氏が富岡鐵齋、岡田三郎助氏などと一緒に、畫壇の三聾だといふ事を知つてゐるI氏は、わざわざ自分の口を相手の耳に押付けて、大きな聲で喚いた。「鈴木君はまだ箏を彈きやしないよ。あれは唯の爪調べぢやないか。」

「さうか。爪調べか。」N氏は何か固いものを一嚥みにぐつと嚥み込んだやうな顔をした。

「それにしても爪調べが素敵だね。」

何時だつたか、清朝の光緒皇帝がまだ達者でゐた頃、波蘭（ポーランド）の或るヴアイオリン彈きが聘ばれて御前演奏をやつたことがあつた。音樂家は幾つか名高い小曲を彈いた。すると皇帝はそのたんびに感心したやうに上品な顏を動かしたものだ。曲が終ると、音樂家は皇帝に向つて訊いた。

「陛下、どの曲がお氣に召しましてございます。」

皇帝は卽座に答へた。

「お前が最初に彈いた曲こそ、世界一の名曲だと思ふ。」

音樂家が最初に彈いたといふのはそれはただの調律で、何の樂曲でもなかつたのである。めでたしめでたし。

それ猫が

眞言宗御室派では、管長の後任選擧について、高野山の法性宥鏗師と浦上隆應師との間にかなり激しい對抗運動が持上つてゐるらしい。

世の中を超脫した僧侶にしても、やはり小さい庵よりは大きい寺の方が住み心地がいいものと見える。

さういふなかに、むかし曹洞に風外といふ禪坊主がゐた。どうしたものか大寺が嫌ひで、老（とし）つてからは大阪の烏鵲樓（うじやくろう）に引込んで、暢氣（のんき）に膝小僧を抱いて暮してゐた。

そこへ、ある時讃岐の高松藩から使の者がやつて來た事があつた。高松の藩主は、自分の領地が猫の額ほどしかないので、誰かいい坊さんに會つて、もつと廣い心の世界の話も聽きたく、おまけに出來ることなら、その坊さんの傳手で、後の世にはもつと祿高の多い土地を

配つて貰ひたく思つてゐたので、かうしてわざわざ使者を立てて、風外を高松に迎へようとしたのだ。だが、風外はどうしても肯かなかつた。

使者はむき出しに讃岐訛りを出して、風外を口説きにかかつた。藩主の言ひつけを承つて來たからには、是が非でも連れて歸りたかつた。風外は泣き出しさうな使者の顏を面白さうにじつと見入つてゐたが、相手の言葉がちよつと途切れると、いきなり下唇を押へてあかんべいをして見せた。

使者は呆氣に取られて歸つて行つた。だが、藩主の前ではまさかにあかんべいの眞似も出來なかつた。

風外が三河の香積寺にゐた頃、ひと夏本山から寺へ使僧が立つた事があつた。その日は蒸暑かつた。夕方になつて風外は風を納れようと思つて、團扇を片手に木履を穿いて使僧の休んでゐる室の前をぶらぶらしてゐた。

使僧はしたたかものだつた。簾越しに風外の浴衣がけの姿を見ると、默つてはゐられなかつた。

演說家の妻

「猫ぢや、猫ぢやとおつしやいますが、猫が下駄はいて來るものか。」

使僧はそれとなく風外にちよつかいを出してみた。風外は猫のやうなおとなしい顏立で聞えた坊さんだつた。猫は默つて下駄を引きずりながら影を隱した。

その翌日、使僧が寺を發たうとすると、風外は多くの弟子達を山門の兩側に竝べて、自分は使僧の後から見送りに出て來た。そして使僧が山門の閾を跨がうとすると、だしぬけに後から大きな聲で、

「それ猫が……」

と呶鳴つた。使僧はびつくりして後を振向いた。そこには猫はゐなかつたが、猫によく似た禪坊主がからからと笑つてゐた。使僧は鼠のやうに小さくなつて逃げた。

佛蘭西自然派の文豪フロウベエルは、自分の作物が出來ると、きつと召使の婆やに讀んで聞かせたものだ。そして婆やが了解めないやうな所があると、すぐそれをもつと解りやすい文句に書き直したものださうだ。

怜悧な婆やが宅に居ないものは、據ろなく女房にでも讀んで聞かせなければなるまいが、多くの場合文學者の女房は、言ひ合はせたやうに、自分の良人の書いたものに餘り價値を置いてゐない。ひどいのになると、自分の良人の書いた作物の名前すら知らないものがある。もしか小說家の中で、自分の女房を愛讀者の中に數へる事が出來る人があつたなら、氣の毒な事には、その人は極めて下手な作家だと言はなければなるまい。

演說家の女房の中には、わざわざ演說會場まで出掛けて行つて、自分の良人が蟹のやうに手を振上げて大聲に喚き散らしてゐるのに聽き惚れてゐる者がある。演說といふものは、あまり賢い人のするものでないし、あまり賢い人の聽くものでもないしするから、女房が聽いたつて、猫が聽いたつて、少しも差支ないかも知れない。

英吉利のヂスレエリイは聞えた演說家だつたが、議會で大演說でもしようといふ日には、

きつと夫人を傍聽席に送り込んだものだ。ある時議會で何かの演說をするといふので、いつものやうに夫人と一緒に馬車に乘込んだ事があつた。

いいお天氣の日で、乾いた路を馬は元氣よく走つた。夫人は外の空氣に觸れようと思つて窓硝子に手をかけたが、どうした機みか、間違つて窓枠に指先を挾まれてしまつた。

夫人は痛くて堪らなかつたので、涙ぐんだ眼で良人の方を振返つた。ヂスレエリイは傍に女房のゐる事すら忘れたもののやうに、默つて何か考へ込んでゐた。

「あ、いけない、いけない。演說の仕組を考へていらつしやるんだわ。」夫人は肚の中で考へた。「折角の演說を邪魔立てしては大變だわ。」

夫人は良人の氣を紛れさすまいとして、ちぎれるほど痛い指先をもじつと辛抱してゐた。もしか指先の代りに首根つこを押へつけられてゐても、夫人は吃度辛抱してゐたに相違なかつた。

馬車は議院の玄關に着いた。自分の女房の指先が窓枠に嚙まれてゐると氣づいた英吉利の大政治家は、キヤベツのやうに青白くなつた。やつと引出された夫人の指は、紫ばんでひし

やげてゐた。

しやれた料理

料理ほど大切なものはない。オスカア・ワイルドだつたか、「朝飯を旨くさへ食はして呉れたら、まあ大抵の事は辛抱しておくさ。」と言つたが、實際食事を旨く食はして呉れたらその他の事は知らぬ顔をして見過してもいい。

京都の八新が料理で名高かつた頃、(惜しい事には今はそれ程ではない。)ある夏の事、主人が夜のしらじら明けに表戸をあけにかかると、その折丁度表通りを通りかかつてゐたお爺さんが、ひよつくり小鳥のやうに中に飛び込んで來た。主人は驚いて理由を訊いた。

「私は京見物に參つた丹波の者でございますが……」

お爺さんは叮嚀な口上で挨拶をした。その言ふところを聞くと、お爺さんは田舎にゐる時

からこの店の板前の評判を聞いてゐたので、京見物に來たのを仕合せに何がな二品三品見つくらつたもので食べさせて貰ひたいと言ふのだつた。

「これはほんの僅かですが……」

と言つて、お爺さんは財布から十圓紙幣を一枚取出して、主人の掌においた。

「胡散臭い爺やな。」と八新の主人は睨んだ。よく見ると、お爺さんにはどこに一つ丹波のものらしい所がなかつた。衣服の着こなしといひ、態度(ものごし)といひ、氣が利いてゐて、誰が見ても中京邊の物持の隱居の洒落者に相違なかつた。

「てつきり悪戯しに來よつたのやな。」と主人は直ぐに相手を見拔いた。さういふことなら此方にも考へがないでもなかつた。主人は相手を言ふがままに丹波の田舎者としてもてなした。そして朝飯の出來る間、暫く休んでゐてもらひたいと、お爺さんを小間に通じて待たせておいた。

主人は直ぐに得意先の大阪の漬物問屋に電話をかけた。そして西瓜の奈良漬の飛切りなのを大急ぎに京都の店まで屆けて貰ふやうに頼んだ。店の若い者の一人は自轉車で宇治橋まで

走らされた。名高い三の間の水を汲んで來させようといふのだ。

三の間の水といふのは、竹生島の辨財天の社壇の下から流れ出ると言ひ傳へられた美しい水で、往時秀吉が伏見にゐた頃には、茶を點てるといつては、いつもこの水を汲ましたものだつた。

水の味といつては、また格別のもので、京都には茶人が多かつた故で、水自慢の古い井戸が未だに方々に殘つてゐる。京役者の隨一人阪田藤十郎は、江戸興業に行く時、江戸の水はまづくて迚も咽喉を越さないからと言つて、わざわざ京の水を樽詰にしたのを、幾つか荷駄馬に乘せて海道筋を下つて行つたといふ事だ。

暫くすると、三の間の水も着いた。大阪の漬物も着いた。八新の主人は三の間の水で茶を煎じて、漬物を菜に茶漬を出した。

「ほんの有合せもので、お口に召すかどうか知りまへんが……」

お爺さんは一口一口嚙みしめるやうにして茶漬を食べた。そして三杯目の茶碗を惜しざうに膳の上におくと、感心したやうに首をひねつた。

「いや、すつかり噂通りで、まつたく恐れ入りました。」

爺さんは叮嚀にお辭儀をして玄關を出た。その後姿が見えなくなると、主人は片手をぐつと握りしめて、今のお客を突き飛ばしでもするやうに前へ出した。

「へッ、どんなもんやい。ざまあ見やがれ。」

ナポレオンの人差指

大和藥師寺の境内から發見せられて、國寶の一つとなつてゐる吉祥天女の繪像は、今では日本の美術史の上で、なくてはならない代表作となつてゐるが、あの天女の指は、不思議なことに右左とも六本づつある。ある人は、あの繪について、あれは當時の高貴の人をモデルにとり、その人の指が六本あつたところから、あの天女も六本指に描かれたといふやうなことではなからうかと言つてゐるが、どうかするとそんな理由から指が一本づつ多くなつてゐ

るのかも知れない。

指といへば、トルストイの書いた「戰爭と平和」によると、大ナポレオンの手は皮膚が柔らかで、色白で、いつも天瓜粉の匂ひがぷんぷんしてゐたさうだ。そして指の節々が女のそれのやうにふつくりして、括りがはひつてゐたさうだ。あの素晴しい英雄が、かうした娘つ子のやうな指を持つてゐたかと思ふと、ちよつとをかしくなるが、それよりも不思議なのはあの人の人差指は中指よりもいくらか長かつたといふことである。人差指が中指より長い人は稀にあるが、その中で萬人にすぐれた男は、ナポレオンの外には先づないと言つていい。

今一つ指といへば、德川時代の名高い國學者上田秋成は、子供の時疱瘡を患つたとかで、右手の中指が小指よりも短く、また左手の人差指も丁度同じくらゐの長さで、とても指の働きはしなかつたといふことだ。

こんな譯で、小さい時から不具者扱ひにせられて、書などあまり習はなかつたものださうだが、それでも晩年になると、心まかせに書いたのが面白いといつて、數寄者の間にかなりもて囃されたものだ。すると自分でもついその氣になつて、いつぱしの書家氣取りに、隨分

揮毫をもすれば、また人の賴みに應じて、自分の著作の中で刊行にならない書物を筆寫してそのお禮で生計の途を立てたこともあるといふことだ。

佛國小說と米國

佛蘭西のアルフオンズ・ドオデエがその傑作「サツフオ」で文壇に乘り出して、一足飛びに大家になつた時のことである。紐育の書肆でふだん宗教物ばかり出版してゐる店が、歐羅巴のいろんな國から、その代表的作家の代表的作物を選んで何々叢書といつたやうな小說集を出版しようともくろんだものだ。そして佛蘭西からはその代表作家としてドオデエが選ばれた。

ドオデエから送つてよこしたのは、丁度その頃出版したばかりの「サツフオ」であつた。本屋はその飜譯をかねて呢懇の或る物堅い牧師に賴んだ。牧師はそんな風な書物を讀むのは

多分初めてであるらしかつた。讀んでみると、男と女のみだらなことがちよいちよい書いてあつたのでびつくりした。で、早速本屋に駈けつけて來て、こんな書物を飜譯したら、アメリカ中は今に果物のやうに腐敗してしまふと、氣色ばんで意見立てをしたものだ。本屋は直ぐ原作者宛に電報を打つことにした。

電報が巴里に着いた時には、ドオデエは先輩や友達と一緒に或る料理屋で御馳走を食べてゐた。一座の顔觸は、ヴイクトル・ユウゴウ、そのお弟子でいつも赤いシヤツを着て、佛蘭西のロマンチストは自分でござると言つた風に、胸をそらして巴里の町を濶歩してゐたテオフイユ・ゴオテエ、それからその頃ずつと巴里に滯在してゐた露西亞のツルゲネエフといつたやうな人達だつた。その人達は、その日もドオデエの新作を褒めそやしてばかりゐた。そこへ使が持つて來たのが、紐育の本屋からの電報だつた。「サツフオ」の作者は胸を躍らしながら封を切つた。なかには、

"Sapho Objectionable"

といふ言葉があつた。思ひ上つてゐたドオデエには、第二の言葉の意味がどうしても解らな

かつたので、變な顔をして電報をそのまま卓子の上に放り出した。皆はどれどれと覗き込むやうにして電報の文字を拾つた。アメリカの小うるさい道德的標準など、少しも氣にかけてゐない歐羅巴の小說家には、何のことやら皆目解らなかつた。飲みさしの葡萄酒のコツプを手に持つたまま仔細らしい顔をして、じつと考へ込んでゐたツルゲネエフは、暫くすると、

「ああ、やつと解つたよ。」

と言つて、ドオデエの顔を見た。その說明によると、これは多分發信人が佛蘭西語と英語とをごつちやに使つたからだといふのだ。なるほどさう聞けばそんなやうな氣もした。で、早速紐育の本屋宛に電報を打つことにきめた。電報の文字は、

「モツトワカリヤスクツヅレ」

といふのだ。電報を出してしまふと、

「どうもアメリカの田舍ぺえには困つちまふ。」

と言ひ言ひ、みなは旨さうに葱のにほひのする料理を食べ出した。

大雅と錦の袋

近頃考古學の知識が一般に弘まるにつけて、古い民族の遺蹟だと言ひ傳へられた地方へ行くと、物好きな蒐集家が鵜の目鷹の目で、石器の破片か何かを嗅ぎまはつてゐるのをよく見かける。

池大雅は風景畫家だけに、よく方々を旅行してまはつたものだが、到るところで珍しい瓦だの、石だのを拾つて歸るのを忘れなかつた。ある時奥州へ行つて勿來の關址を訪ねた事があつた。その折も大雅は京に殘しておいた女房の事などはすつかり忘れてしまつて、珍しい瓦を捜さうとして雜草の生え茂つたなかを這ひまはつてゐた。

大雅は學者や藝術家によくある「忘我」の境地に直ぐ入れる畫家で、面白い話をするか、いい景色を見るかすれば、その瞬間は借金や女房のある事をも、すつかり忘れる事の出來る

ほど調法な心を持つてゐた。ある時遠國に旅立ちをしようとして家を出た事があつた。そのあとで妻の玉瀾は、大雅が生命よりも大事な筆を忘れてゐるのに氣がついたので、それを持つて直ぐにあとを追ひかけた。そして忘れ物だと言つて筆を手渡しすると、大雅は鄭重に頭を下げた。

「どなたかは存じませんが、御親切に有難う存じます。」

家を出て、道の五六町も來ぬうちに、この不思議な畫家は、もう女房の事など忘れてゐたのだ。

大雅は草のなかの窪地で、やつと古瓦を見つける事が出來た。で、叮嚀に土を拂ひ落して持つて來た錦の袋にそれを納めて頸にかけた。

そぼろな、旅窶れのした姿の旅人が、美しい錦の袋を大切さうに胸に下げてゐるので、胡麻の蠅が二人すぐ後に附いた。

大雅が或る茶店に憩ふと、胡麻の蠅二人も同じやうにそこへ來て腰をおろした。そしてじろじろ横眼でこの畫家の素振りを見てはひそひそ話をしてゐたが、その一人はだしぬけに大

雅に話しかけた。

「旦那、旦那はどこまでお出掛けでござんすね。」

「私か。」大雅は馬に話しかけられたやうに怪げんさうな顏をした。「私の旅はどこといふあてはないのだ。」

「へえ、可笑しな旅ですね。」胡麻の蠅は鬚の伸びかかつた頤に冷やかな笑ひを浮べた。「それにしては御心配でせう。そんなに大金をお持ちでは。」

「大金を？　私は大金など持つてはゐないが……」

大雅は大金があつたら是非購ひたいものの幾つかを肚のなかで考へながら、相手の顏を不思議さうに見た。二人とも變な顏をしてゐたが、それでも大雅がよく描いてゐるやうな變な顏よりはいくらかましであつた。

「旦那、白つぱくれちやいけませんぜ。」今一人の胡麻の蠅はぞんざいな口をきいた。「金でなくて、その錦の袋には何が入つてゐるんだね。」

「ああ、これかい。」と大雅はやつと胸の袋に氣がついた。皮肉な笑ひを口もとに浮べながらそろそろそれを明けにかかつた。胡麻の蠅二人は眼を光らした。大雅は中から古瓦を取出した。「お前さん達も、こんな物がお好きだと見えるな。これは勿來の關の古瓦だが……」

胡麻の蠅は呆氣にとられた。そして古瓦を金と見違へた自分達の鑑定を恥ぢて、もつと修業しなければならぬと思つた。修業だ。修業だ。修業は大雅にとつても、胡麻の蠅にとつても同じやうにいい事である。

美術家と驛長

ウヰリアム・チエエスといへば、長らく米國の美術協會の會頭を勤めてゐた、テイントレットの研究家として名高い肖像畫家である。一體米國には、自分の肖像をいつまでも油繪に描き殘しておきたい自惚と、畫かきに支拂ふ謝禮とを、どちらともどつさり持ち合はせてゐる人が多いので、肖像畫の店を張つてゐる畫師も少くはないが、今いふチエエスはそんない

かさまなのとは粒の異つた歴とした藝術家である。

チエエスは先年日本に遊びに來たことがあつた。その折の事、この畫家はとある停車場で（どこの停車場だつたか、畫家ははつきりとその名を覺えてゐない。一體畫家といふものはあまり物覺えがよくないやうだ。）汽車を待つ間のつれづれに雲を見てゐた。

汽車を待つ間の退屈しのぎには、待合に素晴しい顔でもあつたら、それを見てゐるのに越した事はないが、そんな顔がなかつたら、雲でも見てゐるより仕方があるまい。その日は雲が美しかつた。チエエスは歩廊（プラットフォーム）に立つたまま、いつまでもその方に氣を取られてゐた。

そこへだしぬけに貨車がごとごとと入つて來た。そしてチエエスの立つてゐる直ぐ前でとまつたので、美しい雲は見られなくなつた。美術家はちよつと舌打をして外へ歩み去らうとした。

すると、目の前に驛長の制服を着た一人の男が立つてゐた。驛長は叮嚀にお辭儀をした。

「あなたは唯今まで雲を御覽になつてゐましたか。」

「見てゐました。」

美術家はぶつきら棒に答へた。

「なんだつて、そんなに雲を御覽になりますか。」

驛長は雲が自分ひとりの持物ででもあるやうに、胡散（うさん）さうな眼つきをした。

「私は美術家です。」

アメリカ製の美術家は、きつぱりと言つた。美術家だつたら、雲を見ようと、地獄を見ようと、一向掛け構ひがないといつたやうな物の言ひ方だつた。

「美術家でいらつしやる。すると貴方の前に貨車を引込んだのは、以ての外の失禮でした。」

驛長は前よりは一層叮嚀にお辭儀をして、小走りに彼方へ行つたかと思ふと、暫くすると貨車はまたごとごとと音を立てて、後退りを始めた。

美術家は呆氣にとられた。そして世の中には親切な驛長もあるものだと思つた。——どこの驛で、何といふ驛長か、チエエスがこの二つの名を書き落してゐるのは重ね重ね殘り惜しい。

詩人を追出せ

むかし英吉利にスペンサアといふ名高い詩人があつた。この人一代の傑作に「仙姫（フエリイクイン）」といふ長篇の詩があるが、この詩の出來上つた時、スペンサアは誰よりも先に自分の保護者に見せなければなるまいと思つた。保護者といふのは、その頃の社交界の利け者のサウザンプトン伯爵だつた。

詩人は早速伯爵の玄關を訪れた。そして執事を通じてその崇高な原稿を伯爵の手もとまで差出した。伯爵はその折椅子にもたれてぼかんとしてゐたらしかつた。で、原稿を受取るとその場で直ぐに讀み出したが、詩があまりよく出來てゐるので、急に居ずまひを直しながら執事を呼んだ。

「スペンサアはどうした、まだゐるかい。」

「はい。あちらでお待ちでございます。」

「さうか、うい奴だ。この詩はなかなかうまく出來てゐるわい。褒美として二十磅（パウンド）ばかし取らすがよいぞ。」

「畏まりました。」

執事は叮嚀に頭を下げてさがつて行つた。

伯爵は息も繼がずにその後を讀みつづけた。そして馬のやうに幾度か鼻を鳴らしてゐたが暫くするとまた執事を呼び入れた。

「スペンサアはどうした、まだゐるだらうな。」

「はい、あちらでお待ちでございます。」

「さうか、うい奴だ。褒美としてもう二十磅取らすがよいぞ。」

執事は默つて出て行つた。

伯爵は夢中になつてまた讀み入つた。暫くすると執事は三度呼び立てられた。

「スペンサアはどうした、まだゐるだらうな。」

「はい、あちらでお待ちでございます。」

「さうか、褒美としてもう二十磅取らすがよいぞ。」

執事は腑に落ちなささうな顏をして出て行つた。

詩は讀みつげばつぐほど面白くなつた。伯爵はたうとう鐵瓶のやうに癇癪を起して原稿を卓の上に投げつけた。そして大聲で執事を呼び立てた。

「スペンサアめ、怪しからん奴ぢや。早く邸から追ひ立ててしまふがよい。もつと讀んで行つたら、乃公は身代限りをせざあなるまい。」

芽張柳

洋畫家K氏は牛のやうにのつそりとしてゐて、おまけに牛のやうに色が黑いので聞えた男である。

ある時、K氏は他から芽張柳の畫を賴まれた事があつた。

「芽ばり柳――といふと、芽を吹き出した柳ですな。よろしい、あまりお急ぎでなかつたら描いてあげませう。」

氏はゆつくりした調子で返事をした。そして客が歸つた後で、何氣なく緣側へ出て見ると梅がちらほら咲きかけてゐるのに氣がついた。

K氏は考へた。梅が咲くからには鶯も來るに相違ない。鶯が來るからには、燕だつて來ない筈はなからう。してみると、柳もそろそろ芽を張つてゐるかも知れない。

「さうだ、柳も芽を吹いてるかも知れないぞ。」

K氏はいつに似げなく慌てて、賀茂川の川つ緣に出てみた。

案に違はず、柳はそれぞれ芽をふいて、春の支度に忙しさうだつた。實際畫家にとつてこんな不都合な法はなかつた。芽を出すなら出すで、一應畫家に下相談をしてからにしたつて遲くはなかりさうなものだ。

身勝手なのは、唯それだけではなかつた。そこらに立つてゐる柳といふ柳の恰好は、どれ